

治して下さいませ。」

「それは氣の毒な。わしは三百年來隠居してありますが、さういふことなら、一緒に行つて救つて上げませう。」

二人で雲に跨がり、妖怪の住家に来て見ると、道士は大肌脱ぎになつて、七人の姪に酌をさせながら勝祝ひをやつてゐます。悟空はうつかり見付けられて、あの脇の下の眼玉に睨まれては尻込みしてゐますが、菩薩は悠々追らず、徐ろに降り立つて道士の近くに進み、手にした縫針をさつと投付ければ、一同昆蟲の標本みたいに床の上に刺し留められ、血反吐を吐いて死んでしまつた。見れば道士は一丈もあらうといふ大百疋、七人の女は二尺ぐらゐの女郎蜘蛛です。

悟空は取敢ず奥の間に飛び込んで見ますと、三藏等三人は既に緋切れてゐる様子なので、わあつと聲を揚げて泣出しました。

「お師匠様、お情けない姿になりました。これも私が至らぬからで、何とも御申し譯が御座いませぬ。取残された私はこれからどう致しませう。お師匠様々々々、おーい〜。」

身も世もあらぬ愁歎ぶりに、菩薩も同情の涙禁じあえず、

「悟空殿や、さうお泣きなされるな。あんたの忠義をめで、三人の命を取戻してあげませう。」

と懐から菩薩秘藏の解毒丸を取出し、一粒づゝ三人の口に吹入れる。すると三人とも急に小間

物屋を開店し、悉く腹中の毒物を吐いて正氣に復つたので、悟空は天に歡び地に喜び、ありし次第を細々物語つて、一同で心からの感謝を捧げます。

菩薩も禮を返し、前途の無事を祈つた上、ちよいと大百疋の死骸を抓み上げて紫雲山に歸つて行く。餘り人を賞めぬ八戒も口あんぐり、

「何て強い婆だらう。」

とたゞ驚歎するばかりでした。

## 惡魔三兄弟

### (一) 名器陰陽二氣瓶

頃は秋の初めつ方、一行は樹木鬱蒼たる大きな山の手前に差蒐つたが、山の周圍に大勢の番兵が徘徊してゐて、何となく理由ありげに見えます。怪しと睨んだ悟空は、一行を待たせ置き、例の傳で同じやうな番兵と變化し、彼等の仲間に入つて、それとなく事情を探つて見ると、他人事ではない、身の上に降りかゝらんとする一大事だ——。

何でもこの山の獅駝洞に住む三人兄弟の魔王、唐の國から來る和尚を喰へば、不老長生の藥になる

といふので、通りかゝるのを待設けてゐるが、弟子に孫悟空といふ暴れ者が居つて、一筋縄では行かぬ奴と聞き、かくは哨兵を出して、警戒してゐるのだといふ話です。

悟空は心中にせゝら笑ひながら、一人哨兵の群を抜け出で、「御注進々々」と叫んで、山内の獅駝洞へ駆け込みました。中には大勢の手下が甲冑を着けて出動準備を整ひ、一段高い正面に三魔王が威容嚴然と居列んでゐます。

「どうしたのぢや。唐の國の坊主がやつて来たか。」

「はい、坊主はまだ見かけませんが、悟空奴がやつ参りました。」

「どうして悟空といふことが判つた？　そしてどんな様子をして居つたか。」

「身の丈十丈も御座いませうか、見るからに強さうな面構へをした奴で御座います。谷間に蹲踞つて一生懸命に鐵棒を磨きながら、久しくこの如意棒を使はんが、今日こそこれで魔王どもを叩き殺してやれる、たとひ門を締切つたとて蒼蠅になつて、隙間からもぐり込んでやると獨語いで居りました。それで悟空だと判つたので御座います。」

「左様か、それは一大事ぢや——これ者ども、聞く通りの次第だから、若しこの中で蠅を見つけたら、皆して叩きつぶせ。きつと申し付けたぞ。」

し、一番年上の魔王の顔へ飛ばしてやると、老魔王吃驚仰天。

「うわーつ。そろそろ悟空が来をつた。早くつかまへてくれッ！」

と劍を抜いて滅茶苦茶に振廻す。他の二魔王や數百の手下も各々得物を押つ取り「それッ、彼方へ飛んだ」「こつちへ来たッ」と上を下への大騒ぎに、悟空可笑しくてたまらない。我慢しきれず、くすくす笑つた拍子に、うっかり本當の悟空の顔に返つたので、慌てゝ元の哨兵の相に變らうと、もごもご顔を動かしてゐるところを二年若の魔王に見付けられた。

「やッ、彼奴が悟空だッ！　捕まへろ。」

との激しい下知に、悟空は逃げ出す暇もなく、大勢に組伏せられてしまひました。蓋し悟空近來の大縮尻です。

魔王は悟空に隱遁の術があると聞いてゐるから、早速、陰陽二氣瓶と稱する傳來の寶物を取り出して、その中に封じ込みました。この瓶は人間を入れて置くと、半時間もたゝないうちに、どろろに溶けてしまふといふ恐ろしい瓶なのですが、悟空はそんなこととは知りません。一つ寛つくり晝寢でもしてから、脱出策を講じてやらうと呑氣に構へてゐますと、瓶の中がだん／＼熱くなつて、早お臀の肉が焦げかゝつて来た。

さすがの悟空も、これには面喰ひました。瓶の内側を狂ひ廻つて彼方此方突付いて見たが、どうに

もならない。このまゝこゝで蒸焼にされて死する我身は厭はねども、後に残した師匠や兄弟が、どうして天竺へ行けやうぞと、ぼろ／＼涙をこぼして泣きました。不圖先年蛇盤山で観音菩薩から救命の毛を授けられたことを思出し、後頭部に手をやつて見ますと、果して三本の硬い毛が付いてゐます。悟空喜んでその中一本を抜き取り、これを鋭利な錐に變じ、一心不亂に瓶の底を揉立てました。外では三人の魔王が、前祝ひの酒を飲みながら、「もう間もなくソツプになつてしまふだらう。此奴さへ片付けや、三藏は我々の手に入つたも同然ぢや。」

などゝ大恐悦の態です。



實に、一心は岩をも透す、寢小便は蒲團を透すの喩への通り、さしも名器の陰陽瓶も、一心不亂の錐先に破られて、やがて小さい孔があきました。悟空は身を羽蟻に變じてその孔から抜け出し、急いで三藏等の居るところへ歸つて來た。

「おゝ悟空か、餘り長いのでどう致したかと心配してゐた。して山の中に怪しい者でも居つたか。」

「いやどうも大變な奴が居つてえらい目に遇はされました。何しろ、三人の魔王の外に、家來が何千人と居ますから、とても私一人では敵ひません。今度は八戒を加勢に頼んで戦つて來ようと思ひます——おい八戒よ、俺と一緒に行くつてくれ。」

八戒もかう言はれては尻込みが出來ません。二人で雲に乗つて獅駝洞の門前に駐付け、大聲でわめき立てました。

「こら、魔王の鼻糞野郎、大唐の勇士猪八戒様が加勢に參つた。出て來て尋常に勝負をしろ！」

「おい、お氣の毒だが孫悟空は、そんなへなちよこ瓶で參りはしないよ。とうの昔に脱け出して來たんだ。口惜しかつたらかゝつて來いッ。」

この聲を聞いた魔王等は、驚き且つ怪しんで、陰陽瓶の蓋を取つて見ましたが、果して中は藻抜けの殻です。初めてそれと知つた老魔王は、白髪を逆立て、憤りました。

「むう、さてはあの小僧にしてやられたか。かう侮辱されて引込んだとあつては、永年近國に賣つた俺の名にかゝはる。命を的に勝負してやらう。」

と老ひの一徹、劍を引搦んで、一人で門外に躍り出た。

「やい悟空、家來に命じて貴様を討取るのは造作もないが、武士冥利に俺の筋金入りの腕を見せてやる。有難く思へ！」

「はゝゝゝ、爺さん大きく出たね。途中で息が切れたなんて言ひつこなしたぜ。」

「何をツ、生意氣な小僧めツ。」  
兩々秘術を盡して戦ふうち、老魔王のやゝ疲れた頃を見計らつて、八戒横合から打つてかゝれば、老魔は忽ち本相を現はして、大きな獅子と變じ、かつと口を開いて、八戒を一呑みにしようとする。八戒は驚き怖れ、頭をかゝへて一目散に逃出したが、悟空の方は眞直に進み寄り、我から獅子の口中に飛び込んでしまつた。

## (二) 腹の中で越年

三藏と悟淨は、兩人の安否如何にと氣遣つてゐるところへ、息せき切つて八戒が駈戻つて來たから驚きました。

「どう致した？ 悟空はどうなつたのぢや。」

「どうもかうもありません。あの命知らず、何と思つたか、自分から化物の口の中へ飛び込み、一呑にされてしまひました。もう明日の朝ウソになつて出るばかりです。私は敵を斬り開いてやう／＼逃げ歸りました。」

「なに、悟空が妖怪に喰ひ殺されたとな！ あれに死なれては、これから先の旅も覺束ない。あゝ、

どうしよう／＼。」  
三藏地べたに倒れて、聲を揚げて慟哭する。一番に頼みとする悟空を亡くしたんだから、この歎きも全く理りです。

八戒は三藏を慰めやうともせず、白馬の鞍からこそ／＼荷物を解きおろさうとするのを、悟淨が見咎めて聞きました。

「八戒兄貴、お前は荷物なんか取出してどうしようといふのだ？」

「もうこの旅もお止めだらうから、足許の明るいうちに、自分の荷物を持つて、郷里へ歸らうと思ふんだ。悪いことは言はないから、お前も流沙河に歸れ。俺も久し振りに歸國して嬖に遇つた上、棺桶でも買つてお、師匠のお葬らひの準備でもして置かうといふわけなんさ。」

ひどい奴があつたもので、自分一人でどん／＼荷ごしらへに取りかゝる。三藏はこれを聞いて一層歎き悲しみ、側に寄つて慰める悟淨の言葉も耳に入らぬやう、殆ど絶え入らんばかりに泣いて居られます。



一方悟空を呑んだ老魔王は、意氣揚々と洞内に引揚げ、二人の弟に向つて廣言たら／＼です。

「ないんだ、孫悟空なんて、俺様に遇つちや嬰兒も同然さ。瞬くうちに捕虜にしてやつたよ。」  
さうですか、それはお手柄でしたね。そして悟空はどこに居りますか。」

「丸呑みにして、お腹の中に入れてあるよ。」  
「兄さん、それは危ない。彼奴のことだから、腹の中で何をするか判りませんぜ。」

「それもさうだ。ぢや吐出して猿鍋にして、食つてしまはう——これ、誰あるか、鹽水を持って。」  
鹽水をガブ／＼飲んでから、二本指を咽喉に突込み、げい／＼吐き出さうとしましたが、悟空は手足を突張つて踏止まり、中から老魔王を調戲ひます。

「おい爺さん、野暮な眞似をしなさんな。おれは綿入を持つてないから、當分こゝで冬籠りをした上、來春暖かになつてから出ようとしてるんだ。それを無理に吐出さうなんて、人が悪いや。」

「何だ、腹の中で年越しをするつて？ 人を馬鹿にしてあがる。そんなら俺はこの冬中斷食して、貴様を餓死させてやるぞ。」

「ふゝん、斷食でも何でも御勝手に遊ばせだ。俺はちやんと鍋と焔爐を用意して來たから、お前の臍物をむしつて、好物のモツ鍋をして食ふんだ。はゝゝゝお生憎様——」

縁蟲みたいな奴に寄生されて、老魔王も弱つてしまった。それならアルコールで溶かしてやれと、薯焼酎を立續けに七八盃飲みました。悟空は却つて大喜び。食道に口を當てがつて、悉く吸ひ取つ

たから、忽ちいゝ機嫌になり、あゝコリヤ／＼などゝ調子をとりつゝ、例によつて出鱈目な踊りを始める。

老魔王は腹をかゝへて七轉八倒の苦しみ。  
「あいたゝゝゝ。何でも、あなたの言ふことを聽きますから、どうぞお助け下さい。お願いです、悟空様。あいたゝゝゝ。」

「はゝゝゝ可哀さうに——何なら殺してやるまいものでもないか、お師匠様を駕籠に乗せて山の向うまで送つてくれるか、どうぢや。」

「はい／＼、何でも御命令通り致しますから、どうぞお助けを……」

「ぢや、俺は外に出るから口をあけろ。」  
咽喉佛のところまで這上つて來て、口のあくのを待つてゐると、老魔王の耳許で二人の弟が、

何やら囁いでゐる様子。悟空怪しんで試しに如意棒を出したところが、果して老魔王はがちりと嚙み付き、あべこべに前齒を折つてしまった。

「ざまあ見あがれ！ 貴様たちは俺を騙して、嚙み殺さうとするんだな。そんなことをするなら誰が出てやるもんか。」

悟空が再び戻りかけたので、老魔王大狼狽。悪智慧を付けた弟も、また兄貴に腹痛を起されては

大變と、聲を勵まして呼び止める。

「やい悟空、待てッ！ 尊ではお前を豪傑と聞いてゐたが、大の卑怯者だぞ。人の腹の中に隠れるのは、俺たちが怖ろしいからだらう。でなくば出て来て勝負しろ。」

かう言はれて、悟空も成程と思つた。若しこゝで引込んだら、彼奴等を恐れて逃げたのだと笑はれるに違らない。武士は名をこそ尊べ、然らば外に出て大に戦はうと決心して、折れた齒の隙から表の形勢を觀望しますと、仲弟の魔王が手下を率ゐて伏勢し、悟空の現はれるのを待構へてゐます。

よし、向うがそんな心算なら、こつちも計略を以て苦しめてやれ——と、悟空は再び腹の方に下向し、毛を抜いてこしらへた繩を老魔王の心臓に繋り付け、繩尻を取つて今度は鼻の孔へ廻り、中からこちよ／＼探ぐる。老魔王思はず「ハツクシヨン」と大きな嚏をした拍子に、悟空はひよつこり躍り出し、そのまゝ空中に飛上つて、ぐい／＼繩を引上げたから堪りません。老魔王は歳暮の鮭みたいにぶらん／＼しながら、宙に釣上げられて行きます。

### (三) 水漬になつた八戒

兄の魔王が、鼻の孔に繩を通されて吊るし上げられるのを見ては、弟たるもの晏如としては居られませんが、しかし早急の場合とて拜み倒しの一策あるのみです。

「悟空様々々々、まあ待つて下さい。あなたは正々堂々と出て来て戦ふかと思つてゐたのに、そんな騙し討ちみたいな眞似をするんですか。それで大唐一番の豪傑と言はれますか。」

「何を失禮な。お前だちこそ俺を嚙殺さうとしたり、今度は大勢で待伏せをしたりしたぢやないか。」  
「それは全く私どもが悪う御座いました。この通り謝りますから、どうか兄貴の命を助けて下さい。そしたらきつと三藏法師様をお送りします。どうぞや大慈大悲のお旦那様……」

正直者の悟空は、かうおだてられると、つい乗せられていゝ氣持になり、早速老魔王の繩をほどいて、釋放してやりました。

「ぢや赦してやらう。その代り今言つた約束に間違はあるまいな。」

「お有難う御座います、お蔭で三人が助かります。間もなく駕籠を持つて、お迎ひに参りますから、先に歸つてお待ちになつてゐて下さいまし。」

横を向いてぺろり舌を出したのも知らず、總てを眞に受けた悟空は、肩など怒らし大威張で歸つて行く。

三藏は頼みにする悟空が死んだと聞いて、身も世もあられず、歎いてゐましたが、不圖向うを見ると、悟空がにこ／＼しながら戻つて参ります。

「これ八戒、お前は悟空が殺されたなどと偽りを申したな。あれ見よ、あの通り元氣な顔をして、歸つて来たではないか。」

「へーい、でも私は確かに、兄貴に呑まれたところを見たんですがね。ちや何ちやありませんか、お師匠様に思ひが残つて、幽的になつて戻つて来たのでせう。あれはきつと幽霊ですよ。」

悟空はこの問答の最中に歸着して、いきなり八戒の横つっぽうを殴り付けました。

「何を言つてるんだ、俺は幽霊でもお化でもないぞ。貴様が逃げて行つてから、一人で魔王の腹の中にはひつて、うんと虐め抜いた上、お師匠様の駕籠を出させるやうに吩咐けて来たんだ。それになんだ貴様は荷物なんぞ片付けあがつてどうしようといふのだ。」

「何もさう人を殴らなかつていふぢやないか——さう言やあ足もあるやうだし、まあ無事で何よりだつた。本當に兄貴、御苦勞だつたなあ。」

酒蛙々々然として、お世辭を列べ立てる。三藏は再生の思ひで打喜び、悟空の手柄を賞めながら、いそぐと出立の用意を始めました。

一方老魔王の方は、散々の目に遇つて最早再起の勇はありませんが、弟二人は固より心から屈服してはみません。先刻も偽つて悟空を歸したのですから、再び手下をまとめて雪辱戦に押しかけて來ますと、これを見た八戒は、せうら笑つて悟空を揶揄します。

「兄貴々々、先刻お前は駕籠が迎ひに來るとか言つたつけが、あべこべに戦さをしに來たやうだぜ。」

お前は狐にでもばかされて來たのぢやないのかい？」

「人を馬鹿にするな。老魔が俺にやられたので、あの二人は義のたちにその仕返しに來たんだ。こつちも兄弟分が三人あるから、今度はお前が行つて二番目の魔王をやつ付けて來い。」

「そんなことならお安御用だ。俺だつて兄貴ぐらゐの働きは出来るよ。」

いゝ氣なもんで、熊手を振り／＼立向つて行きましたが、十二三合するうち、魔王はさつと鼻を延して八戒を巻きすくめ、家來と共に勝鬨作つて獅駝洞の中に引揚げました。三藏遙かにこれを見て、おろ／＼聲。

「大變だ、大變だ。悟空！早く行つて助けてやれ。」

悟空はわざと落着き拂つて烟草すば／＼。

「お師匠様も不公平ぢやありませんか。私が捕まつた時は平氣でゐて、八戒が捕まると、そんなに慌てなさるなんて、依怙最眞が過ぎますよ。」

「いや／＼さうではない。お前は術を知つてゐるから、大抵大丈夫だと安心してゐるが、あれは生來の愚か者ゆゑ、愚圖々々してゐては危ない。早く助けに行つてくれ。」

「左様ですか。ぢや行つて參りませう。」

澁々ながら雲に乗つて出かけて行きました。



悟空はやがて獅駝洞の門前に飛び来り、羽蟻に變じて中に入つて見ると、不便や八戒は手足を括られ、池の中に漬けられて、土左衛門になりかけてゐます。惡戯好きの悟空は、耳の側に飛んで行き、嚴かな作り聲をして呼かけました。

「これ、汝は猪悟能字は八戒と申すか。」

「はい、私は猪悟能ですが、私の法名を知つてゐるのは何方です？」

「わしは閻魔王の命令で、汝を冥途へ伴れに參つたのぢや。」

「へーい、では私は死ぬので御座いますか。私は今一人で死ぬのは厭で御座います、そのうち師匠や兄貴の悟空なども、こゝの魔王に殺されるでせうから、その時一緒に參ります。どうか暫くお待ちなすつて下さいませ。」

「さういふわけなら待つてやらんものでもないが、こゝに滞在してゐるのに費用が要る。汝はその金を持つて居るか、どうぢや。」

「へい、多分のお錢は御座いせんが、師匠に内緒でくすねて置いたお布施を持つて居ります。

取の中に隠して御座いますから、取出して下さいませ。」  
悟空はその言葉に従ひ、取の中に手を入れて見ると、果して四五兩の金子が貯へてありましたので、思はずくすく笑ひ出した拍子に、ぱつと本相を現はしてしまつた。初めてそれと知つた八戒は、牙を鳴らして大憤慨。

「この詐欺取財奴！ 人が死ぬか生きるかの場合に、よくも騙して金を取つたな。」

「は、ムムムム、さう怒るなよ。こんな目腐れ金なんかどうでもいゝぢやないか、それより今お前の命を助けてやる。」

と如意棒で繩を解拂ひ、二人でばらばら逃出す。見廻りの番人が、その後姿を見付け、魔王に斯くと注進しましたので、兄弟二人で後追驅け来り、再びこゝでチャン／＼バラ／＼が開始された。

#### (四) 釋迦如來が來援

魔王は悟空の手並の非凡なのを知つてゐるから、一番強い末弟と數千人の家來で手向ひ、おつ取り圍んで他所に眼をくばる暇のないやうに攻め立てる。一方鼻の長い中の弟は、その隙に乗じてまたもや八戒を巻き込み、老魔王は恭順を粧つて忙しく三藏を迎ひに行き、悟淨と白馬もろとも、う



まうま洞内へ誘き入れるや、わつと揚げた喊の聲を合圖に、一齊に軍を引いてピシヤリ門を締切つてしまひました。

取残された悟空は敵の引揚げ方を不審に思ひ、急いで三藏等の居たところに行つて見ましたが、果せる哉、人馬ともに影も形も見えない。さては夢中で戦つてゐるうちに謀られたよな、ちえつ無念なり残念なりと、がり／＼齒齧をして口惜しがつたが、今更どうにもなりません。

しかしかうしてゐるうちにも、師匠の安否が氣遣はれます。悟空は雲に乗つて窺に、洞内に飛入り、下僕のやうな風をして彼方此方と搜してゐるうち、一人の仲間を見付けて、それとなく聞いて見ました。

「おい兄弟、今日は大した騒ぎだつたなあ——ところで捕まへられた和尚はどうなつたらう？」  
「さあ、俺もよくは知らんかね。何でも先刻御近侍の人が、話してゐたのを聞くと、悟空が取返しに来るのを虞れて、生のまゝで食つてしまつたとかいふ話だつたよ。」

これを聞いた悟空は、心から落膽してしまつた。三藏が死んでしまへば、今までの艱難辛苦も水の泡となつて、天竺行き目的もなくなる。仕方がないから釋迦如來様のところへ行つて、頭に嵌めた金の箍を外して貰ひ、その上で故郷の花果山に歸り、三藏の菩提を弔らうと、しく／＼しやくり上げながら、悄然として靈山に向ひました。

靈山では釋迦如來が、文殊普賢の兩菩薩を招いて、心靜かに琴など聞いて居られます。悟空はその前に畏まつて、涙ながらこの次第を語り、金箍をはづして下さるやう頼みました。如來は總てを洞觀してゐられるから、敢て驚かれませんか。

「さう心配致すな。恰度魔王の主人に當る兩菩薩も見えてゐるから、一緒に行つて善後策を講じてやらう。郷里に歸るなど、申さずに、我々に蹤いて來るがよい。」  
と遊る悟空を伴れ、四人雲に駕して獅駝洞へと志し給ふ。

やがて獅駝洞の城内に到着して、悟空が聲高に悪罵を浴せかけると、三魔王鉦を揃へて一齊に躍り出して來た。しかし今度は悟空に立派な後見が付いてゐるから大丈夫。いゝ加減戦つてから空中に舞ひ上り、如來の蔭に隠れるのを、三魔王は逃さじものと追ひかけて來たが、そこには舊主の三尊が嚴然として立つてゐられる。

「やゝゝゝ、こりや御主人様方だ。相手が悪い——。」  
「これ畜生ども、悔い改めて主の許に歸れ！」

と耶蘇教張りで宣ふと、三魔王は忽ち本相を現はし、老魔王はライオン、仲弟は白象、末弟は金翅の孔雀に變つて三尊の前にひれ伏しました。悟空はこれを見て大威張り。

「へん、どんなもんだい、思ひ知つたか——しかし如來様、折角彼奴等を降參させて下さつても、師

匠が死んでしまつたのでは、どうすることも出来ませんが……」

「いや、三藏はまだ殺されてはゐぬ筈ぢや。きつと洞内に幽閉されてゐるからよく捜して見よ。」

悟空は半信半疑ながら、雲を降りて隈なく洞を捜つて見ると、主従三人果して安泰であつたので、急いで三尊の前に伴ひ來り、心からの謝禮を申します。三尊も喜んで交るべく前途を激勵した上、釋迦如來は孔雀、文殊菩薩は獅子、普賢菩薩は白象に乗つて、悠々と靈山に歸つて行かれました。

## 白鹿と蛇女

### (一) 赤ン坊徴發

一行はかくして獅駝洞の大難を遁れ、また數月の旅を續けて、ある城下町に差蒐りましたが、妙なことは、方々の民家の前に、絹に包んだ赤ん坊が置いてあります。犬の子や雛つ子なら銀座の往來でも賣つてゐるが、まさか人間の子を賣るんでもあるまい。不思議に思つて、投宿した旅館の亭主に聞いて見ると、こゝに見逃し難い人道問題が胚胎しつゝあるのです。

——この國の王は、日本の馬鹿殿様といつたやうな、極めて柔弱暗愚の男。三年ばかり前、一人の老人がトテシヤンな娘を連れて來て、國王に獻じましたところ、これが非常に氣に入つて、老人を家老に取立て、娘を引付けて日夜の歡樂。その結果遂に腎虛性神經衰弱に侵されて、吹けば飛ぶやうに瘦せ細つたが、例の家老は何處からか、不老長生の藥と稱するものを持來り、千百十一人の孩兒の肝と一緒に煎じて飲めば、たちどころに元氣が出ると薦めたので、國內に強制的赤ん坊徴發令を出し明日はその納入の期限だと言ふのです——。

慈悲深い三藏は、國王唯一人の碌でもない慾望のために、千百餘人の子供か殺されると聞いては、黙して觀過するわけには行きません。三人の弟子と相談した上、兎も角宮中の様子を見届けるため、羽蟻に變じた悟空を連れて參内しました。

見ると國王は青靨篋のやうな顔で、氣息滔々として坐つてゐる側に、家老の爺は傲然と控へ、何彼と問ひ尋ねます。

「其方はどこから何用があつて參つたのぢや？」

「私は唐の國から西國へ經文を求めに參る者で、唯今旅券の査照をしていただきに參内致したので御坐る。」

「西國にどんないゝところがあるのぢや？ 昔から自分の郷國ほどいゝところはないといふではないか。佛道の經文のと馬鹿骨折な……」

無禮千萬な惡態を吐きますので、さすがの三藏もむつとして黙りこくつてゐると、羽蟻の悟空は三

藏の肩に飛んで来て、そつと耳打ち。

「あの爺は確かに妖怪です。私は居残つて彼奴の様子を見て行きますから、あなたは一旦宿にお歸りになつて下さい。」

と注意して飛去りましたので、三藏は暇を告げて立歸る。と、入違ひに收税吏があはたゞしく参内して、國王に奏上しました。

「一大事で御座ります。先刻突風が吹いて参りまして、獻上の孩兒が悉くどこかへ吹飛ばされてしまひ、皆目行方が判りません。」

國王斯くと聞いて大悲觀。

「孩兒の肝が取れなくては、わしは死んでしまふ外はない。爺や、どうしたらいいだらう。」

「御心配遊ばすな。あの唐から来た坊主は修行を積んでゐますから、孩兒の肝より十層倍も効能が御座います。今宿へ歸つてゐるでせうから、早速兵隊をやつて捉まへさせませう。」

孩兒の代りに、三藏の肝を取らうといふのです。大變なことになつたもんです。



悟空は急いで宿に歸り、件の趣きを告げますと、三藏は色を失つて歎きました。

「折角子供たちを助けようと思つた情が仇になつて、自分が殺されるとは何としたことだらう。悟空や、お前に何とかいゝ工夫はないか。」

「左様でございます。何しろ急場のことですから、あなたと私と姿を換る外に方法が御座いませぬ。失禮ですが私になつて下さいませるか。」

「わしを救つてくれるなら、お前の弟子など何となつたつて構はない。」

「ぢや急いで支度を致しませう。八戒よ、表から少し泥を取つて來てくれ。」

八戒應と答へて庭に走り出で熊手で土を掻き取り、自分の小便を交ぜて柔かにして持つて來た。

悟空甚だ面白くないが、速急の場合已むなく顔をしかめながらこれに面印を押し、それを三藏の顔に當てがつて呪文を唱へますと、三藏はすつかり悟空の姿になりました。

悟空も急いで三藏に變り、やつと支度が出來上つた處へ、千人餘りの兵隊がどや／＼押しかけて來て旅館を圍み、隊長らしいのが、殊更に慇懃を装うて招請の詞を述べます。

「唐國の大和尚親下、國王から唯今直ぐにこの御招待で御座います。御足勞ですが、どうぞいらして下さいますせ。」

賈三藏の悟空も眞面目腐つて、

「それは／＼忝けない。陛下のお招きに預かるとは愚僧身に餘る光榮で御座る。直ぐ様御伴致すで

御座らう。」

と兵士に護衛されつゝ、悠々として参内に及ぶ。國王は家老の爺を顧み、してやつたりと大喜びです。

「おゝ唐國の大和尚か。よく参つてくれた、待ち兼ねたぞよ。」

「御懇ろなお招きに預り、有難う存じます。して何ぞ御用でも御座りますか。」

「實は折入つて聞いて貰ひたい頼みがある。わしは久しく患つてゐるので、この家老が薬を見付けてくれたが、高僧の肝と一緒に服まなくては、効目がないといふのぢや。若しこの無心を肯いてくれるならば、和尚をこの國の神に祭りきつと香華を絶やさんから、どうぞ肝を譲つてくりやれ。」

肝をくれとは途方もない無心だが、悟空はケロリとして平氣なもの。

「それはお易い御用で御座います。愚僧は色々な肝を持つて居りますが、一體どんな色の肝が御入用で御座いますか。」

この時家老は口を出して、

「黒い肝が入用なのだ、それを譲つて欲しい。」

「サア、黒が品切れになつてゐなければ宜しう御座いますが、兎に角、腹を割つて見ることにしませり。チヨツと刀をお貸し下さいませ。」

と雙肌脱いで、家來が持つて來た刀をグサと腹に突立て、その穴からニヨロ〜と臟腑を引張り出します。國王はじめ列びある臣下は、皆氣味悪がつて顔を背けるばかり。悟空は「まだある〜」などと呑氣に拍子を取りながら、全部を引張り出した上、自分で檢べて見ましたが、紅肝、白肝、緑肝など三元牌のやうな肝ばかり、肝腎の黒肝がありません。

## (二) 悟空の肝、家老の肝

悟空は横眼で家老を睨めながら、臟腑を元のやうに腹の中に納め、急に本相に還つて大聲で呼はりました。

「陛下、その家老こそ黒い肝を持つてゐます。早くぶち殺してお取りなさいッ。」

家老は悟空の本相を見て吃驚敗亡。

「ヤ、ツ、貴様は天上を騒がせた孫悟空だな。」

と言ふが早いか殿上を走り出で、奥殿に居る王の寵姫を拉し、一條の物凄光と變つて、何方ともなく逃去りました。

これを見た群臣の驚きはもとより、國王はたゞ夢に夢見る心地です。

「さてはあの家老は、妖怪變化であつたのか。これまで欺瞞されてゐたとは知らなんだ——それにしても貴僧は、一體如何なる人ぢや？」

「は、は、は、今朝拜謁したのは本物の三藏法師、私は弟子の悟空と申す者で候。陛下はあの妖怪の言葉を信じて、師匠の肝を取らうとなされたにより、私が姿を變へて参内し、魔物を退治致したので御座る。」

國王はこの仔細を聞き、臣下を旅館に遣はして一行を招ずると、三藏は八戒悟浄の兩人を従ひ、悟空の相のまゝでノコノコやつて来たからちとチトです。悟空急いで殿を下り、ふつと息を吹きかけて三藏を本相に還し、打揃つて拜謁しますと、國王は喜色满面。

「この度の仕儀、誠に面目次第もない。お蔭で妖怪を追ひ拂ひ、祝著至極に存するが、なほこの上のお願ひには、どうぞ、悟空殿の神通力であの妖怪を打ち滅ぼし、後日の患ひを除いては下さるまいか。」

「お頼みとあらば、一骨折つて見ませう。しかし彼奴の住家は一體何處で御座いますか。」

「なんでもここから南七百里の清花洞と聞いてゐる。なんなら入用だけの軍馬を供に上げて宜しいが……。」

「いや、それは御無用です——では、御師匠様、一寸行つて参ります。八戒よ、俺と一緒に往つてくれないか。」

まるで散歩にでも出かけるやうです。皆が呆氣に取られてゐる中を兩人雲に乗つて南方に飛去り、やがて七百里ばかり来た頃、楊柳茂る間に清花洞らしいのを發見した。兩人いきなり門を開いて亂入すると、爺は例の美人に酌をさせながら、一杯聞し召してゐたが、悟空を見るや猛然怒りをなし、大だんびらを取上げて斬つて蒐る。

しかし此方は二人ですから、敵ひつこはありません。暫くは戦つてゐたが、遂に疲れが出て三十六計、凄い光を後に洞外へ逃げ出した時、突如天上から鋭い聲がかゝりました。

「畜生待てッ！ 悟空八戒の兩君、わしに免じて奴の命を助けてくれ給へ。」

「やあ、誰かと思つたら南極星老人か。どうしてあの妖怪を知つてゐなさる？」

「あれはわしの庭に放し飼ひにしてゐた白鹿だが、隙を窺つて三日前に逃げ出しましたのぢや。天上の三日は下界の三年、捜し尋ねて漸く今見付けました。」

「御老體の所有なら、命を取らうとは申しませんが、これをどうして下さる？」

「それは濟まないことをした。幸ひ靈藥の棗を持つてゐるから、持つて行つてその王に服せなさい。きつと癒ります。」



こんなことを聞き逃しが出来ないのが三藏の慈悲生。急いで聲のする處へ駆付けて見ますと、一人の綺麗な女が松の大木に縛り付けられ、絶えるばかりに號泣してゐます。

「御婦人、一體どうしてこんな目にお遇ひなされたのぢや？」

「おゝいゝ處へ来て下さいました。私は近村の者で御座いますが、昨晚家へ強盗が入込み、両親は斬殺され私は攫はれて来ました。賊は私に女房になれと申すのを、飽くまで拒みますと、私を縛り付けて何處かへ行つてしまつたので御座います、御願ひで御座います、どうぞ御助け下さいませ。」

「それは可哀さうな。助けて上げますとも……」

馬を下りて繩を解きにかゝらうとした時、悟空がやつて来て急に遮り止めました。

「お師匠様、それはお止めなさいませ。この女は我々を騙さうとする魔物で御座います。」

「ほう左様か。お前の言ふことにはいつも間違ひがないから、ではこのまゝはふつて行かう。」

實際この女は、悟空が觀破した如く、妖魔の精なのです。生來童貞を保つてゐる三藏を誘惑して、

いはゆる初筆の快樂を貪らうとしてゐた目的が、悟空のために破られたのですから口惜しくてならぬ。何とかして物にしようと思ひ續けます。

「和尚様ッ、あなたは人を見殺しにして、それで佛弟子と言はれますか。そんな不人情をして天竺に

行つたとて、佛の御座りませう……」

繩を裂くやうな聲で泣付かれるので、一旦行きかゝつた三藏はまた思ひ直した。

「悟空や、あれの言ふことも全く道理ぢや。昔から一人助けるのは、七本の塔婆を建るより功德だといふから、矢張りあの婦人を助けることにしよう。」

「はゝゝゝ、また例のお慈悲病を起しなさいましたな。全くお師匠様には付ける薬がない。しかし強

つてお止めすれば御機嫌を損ずるでせうから、どうなと御意の儘になさいませ。」

仕方がないから、打ちやつて置くと、直ぐ八戒に命じて繩をほどかせたので、女は大喜び。幾度か三藏を禮拜し、いそぐと一行に蹤いて参ります。

そのうち日も西山に没したので、森の端にあつた一軒の喇嘛寺に宿を求め、例の婦人とは室を異にして寢に就きましたが、夜中に變事でも起つた様子で、本堂の方が急にざわつき出した。目ざとい悟空は、むつくと起きて、單身行つて見ると、二人の喇嘛僧が殆ど骨ばかり残して喰殺され、その周圍に大勢の僧侶たちが、驚き騒いでゐます。

「これは残酷な——一體どうしてこんなことになつたんです？」

「どうもかうもまるつきり判りません。二人はお當番で本堂に詰めてゐたのですが、何だか凄まじい聲がするのでみんな来て見ますと、この始末なんです。」

「で、何か犯人の手掛りになるやうなものは、残つてゐませんでしたか？」

「さあ別にこれと言つてありませんが、不思議なことには私等がこゝへ駈付けた時に、何とも言へない匂ひが致しました。」

これを聞いて悟空の第六感は、偕はあの女が犯人に相違ないと睨みを付けた。

「さうですか——今夜のやうな時、お宿を借りたのも何かの御縁ですから、一つ私が讐を取つて上げませう。皆さんはあちらに行つて静かにしてゐて下さい。」

一同を庫裡の方へ歸した上で、自分は十五六歳の綺麗な小坊主に變り、佛前に端座してポク／＼木魚を叩きながら、静かにお經を讀み始めました。



やがて夜もしん／＼と更け渡り、草木も眠る丑滿の頃、得ならぬ薫りがするとともに、さや／＼と絹摺れの音がして、一人の婦人が本堂にはひつて來ました。見れば案の定三藏が助けた女で、一段と粧ひを凝らした容色眞に目ざめるばかり、満面に媚を呈して悟空の側に、にじり寄つた。

「ほんに可愛らしい小僧様だこと。もうお經なんか止めにして、私と一緒に面白いことをして遊びませうよ。」

先刻殺された坊主は、この手で驚かされて餌食になつたのですが、石部金吉の悟空には通用しない。

いきなり木相を現はして打つてかゝれば、女怪驚いて飛び退きさま、二振の劍を抜いて立向ひ、佛壇の前で大立廻りが始まる。

掛引のうまい女怪は、暫く戦つてゐるうちに、鞆を脱いで自分の姿に變へ、これを對手にさせて置いて、本身は一陣の風と化し、三藏の室の方へ飛んで行つたが、悟空は一向氣が付きません。矢鱈無性に攻め立て、たうとう敵を打倒し、おのれつと最後の一撃を加へようとすると、これは如何なかと、女の鞆に變つたから驚きました。

「ちえつ残念！ さてはあのアマに謀られたか。」

齒を噛みながら、いそいで方丈に駈け付けて見れば、八戒と悟淨が、たゞうろ／＼うろたへてゐます。

「おい、お師匠様はどうなすつたツ？」

「今さつと風が吹いて來たと思ふ間に、お師匠の姿が見えなくなつたのだ、それで捜してゐるところなのだ。」

「間拔奴！ お前たち二人が／＼で護衛してゐながら、おめ／＼攫はれるといふ馬鹿があるカツ。」

悟空かん／＼になつて、二人を殴り殺すとまで怒つたが、自分の方にも鞆に騙されて、女怪を逃した落度がある。悟淨がことを分けての陳謝にやう／＼怒りを鎮め、三人で前日の松林に引返し、土



地の氏神を召出していろ／＼聞き訊して見ると、多分そこから千里餘り南の陷空山に住む、女怪の仕業だらうといふことです。

#### (四) 三藏と結婚式

そこで三人は、白馬とともに雲に乗つて陷空山の麓に至り、先づ八戒が斥候になつて状勢を探りに出ますと「無底洞」と彫付けた樓門の前の小川で、大勢の女が膳碗その他の食器類を洗つてゐるのを見付けました。

「姐さん方今日は。大變御精が出ますね、ちとお手傳ひませうか。」

「いやな人ね、あんた見たいな汚い坊さんに、手傳つて貰はなくたつてよござんすよ。」

「へ／＼／＼、これは御挨拶だ。これでも郷里には可愛がつてくれる女房がありますぜ——したがこちらでは何か振舞ひごとでもあるんですか。」

「さうよ。昨夜お姫様が、唐の國とかの和尚様を連れて來られて、これから御婚禮の盃を遊ばすのよ。そりや豚みたいなあんたとは違つて、本當に惚々するやうな好男子だわ。」

八戒はつまらんとくろで醜の棚下しをされ、ぶん／＼怒りながら、悟空たちの待つてゐるところへ

歸つて來た。

「おい兄貴、お師匠様は、今日あの女と御婚禮なさるんだとよ。今ごろはちやうどお引けで、何も彼も夢中な時分だらう。俺たちだけ残されたつてつまらないから、荷物をまとめて郷里へ歸らうぢやないか。」

「何をたわけが。お師匠様に限つて、金輪際そんなことのある筈がない。俺が行つて様子を見てくるから、暫く待つてゐてくれ。」

悟空は例ものやうに羽蟻に變じ、無底洞の中に忍び込んで見ると、さすがに女の住居だけあつて、調度や裝飾など總てみやびなもの。化粧室では例の女怪が大肌脱ぎになつて、お白粉べたく／＼御婚禮のおめかしに一生懸命ですが、奥の間に押籠められてゐる三藏は、ぼんやり坐つたまゝ、天井を仰いでたゞ溜息を吐いてゐます。



悟空は格子の間から飛入りましたが、三藏が自分の諫言を用ひないため、こんな面倒が起きたのだと、少々不快に思つてゐましたから、ちよつと調戲つて見る氣になりました。

「お師匠様々々、これから三々九度なさうで、お目出たら御座います。」

三藏は悟空の聲を聞いて蘇生の思ひです。

「あゝ悟空か、よく来てくれた。目出たいことなど少しもない、早くわしを救ひ出してくれ。」

「だつてあなたは、私の言ふことを肯かずに、お助けになつた可愛い女と一緒になられるんぢやありませんか。いつそのこと、赤ちやんでも拵へて、こゝの旦那様に落着かれた方が、天竺なんかへ行くより得で御座いますぜ。」

「失禮な、お前はわしをなぶらうとするのか。わしは唐を出てから、塵ほども慾念を起したことはない。萬一こゝで女人戒を破り、地獄道に墮ちたら、經卷を求め尊とい使命をどう致すのぢや。たわけたことを申すな。」

正直な三藏はむきになつて、きつい怒りやう。悟空笑つて、

「はゝゝゝ、今のは冗談で御座いますよ——とこゝろであの女はこれから盃事をしようとしてゐますから、あなたは我慢して一杯だけ召上りませ。そしてその盃に泡が立つやう酒を注いで下されば、私は泡の中に飛込んで彼奴の腹の中にはひり、思ふさま苦しめてやります。」

「左様か、屹度ぬからぬやう頼んだぞ。」

この時、お化粧の出来上つた女怪は、にこゝしながらやつて来て、三藏を廣間に連れて行き、自分が先づ一杯飲んでから三藏に差します。三藏も仕方なく、眼をつぶつてそれを飲み乾し、計略通り

泡立つやうに酒を注いで返盃しましたが、女怪は、たゞもう嬉しがつて直ぐ飲まうとは致しません。三藏の膝にしなだれかゝつて、色々甘つたるい話をしかけ、暫くしてから盃を取り上げた時は、もう泡が消えて羽蟻が丸見えになつてゐたので、指先でこれをつまみ上げ、ひよいと庭の方へ弾き捨てました。

計略齟齬した悟空は、口惜しさ腹立たしさ。急に鳥に變じてそこにあつた酒肴を引つくり返し、その上座敷中に糞をひり散らして逃げ出したから大騒動です。女怪も悄氣返つて、

「この洞内に居ない筈の鳥が出たのは、婚禮に凶い日なのかも知れません。仕方がないから今日は止めにして、改めて吉日を選び、夫婦の固めを致しませう。」

と三藏を一室に押籠めた上、すこゝ自分の居間に引取りました。

一方逃出した悟空は、暫く後庭の草の間に隠れてゐましたが、不圖後を見ると、小さな堂の中に、「尊父李天王靈位」「尊兄哪吒三太子靈位」と、記した二つの位碑を祭り、いろゝな供物をしてあります。李天王と言へば、玉皇上帝麾下の元帥で、哪吒太子とともに豫て悟空とは知り合ひの仲。あの女が李天王の娘ならば、玉帝に訴へて李父子を連れ來り、その手で三藏を取り返して貰つた方が手數がかゝらぬと、急ぎ訴狀をしたゝめた上、二つの位碑を證據に携へ、雲に乗つて天上にと馳せ向つた。

(五) 李天王と對決

やがて悟空は天上に到り、靈霄殿に玉皇上帝を拜して訴狀を奉る。帝一覽あつて訴への趣をお取上げになり、司法大臣太白金星を、悟空とともに李郎に遣はし、適宜の策を講じて三藏を救ふやうに御傳達あつたが、李天王は訴狀を讀みもを終らず、眞赤になつて怒りました。

「悟空！ 貴様は皇帝に讒言して、わしを陥れようとするのだな。わしには女の子は、今年七つになる貞英しかないのに、どうしてそんな悪事が出来るかッ。この偽り者め！」

あはや掴みかゝらんず勢ひ。太白金星は證據の位碑を示して、怒りを解かうとしても、見向きも致しません。

「そんな板つべらなぞ見る要はない——こら悟空、下界ですら誣告は重罪だぞッ。況して天上の元勳を辱しめたからは、貴様をこの場でぶつた斬つてやる！」

大勢の家來を呼んで、悟空を十重二十重に縛らせ、光爛々たる大劍を拔放つて、將に斬り下さうとしました。

悟空の危ふさと、全く風前の燈火どころの騒ぎぢやありません。

この時、花道ではない隣の室から、

「暫く、暫く。」

といふお誂ひの聲。がらり襖を開けて駆け込んだ哪吒太子は、しつかと李天王の手を支へ止めた。

「父上、暫くお待ち下さい。」

「忤、止めて致すな、そこ放せッ。」

「いや、父上のお忘れになつてゐることが御座います。確かに娘が下界にゐる筈で御座います。」

「莫迦を申せ。わしにはお前たちの外に子供がないではないか。」

「左様では御座いません。三百年前、靈山で如來の香花を盗んだ女がつかまつた時、父上が助けておやりになつたことが御座います。女はその御恩を感じ、下界に下つて、父上を親人と崇めてゐるといふ噂を、風の便りに聞きました。血縁の妹ではありませんが、きつと、その女のこと御座います。」

「さう／＼、さう言はれ、ば思ひ出した——悟空、わしが忘れてゐた。悪かつた、謝まる。」

自分で繩を解いてやらうとするのを、悟空は拗ねて故意と體をひねくり、どうしても解かせようと致しません。

「人をこんなひどい目に遇はせて置いて、今になつて謝まるなどと、それで濟むと思ふか。俺は縛ら

れた儘で、玉帝の御前に行き、對決して黑白を決めなくては、腹の蟲が納まらない。さあこの儘にして連れて行け、連れて行けッ。」

足をばたく、腕白餓鬼みたいに駄々を捏ねる。李天王もこれにはすつかり持て餘してゐるので、金星は氣に毒になり、中にはひつていろく執成してやります。

「まあ、孫君、さう怒り給ふな。そりや君のいふのも尤もぢや。尤もぢやが、しかし御前で對決して雙方言張つてゐるうち、必ず二三日はかゝる。天上の一日は下界の一年だから、その間に三藏法師がどんな目に遇ふか判るもんぢやない。それよりか溫和しくして、玉帝にお願い申し、李天王親子に行つて貰つて、師匠を救ひ出した方がいゝではないか。」

かう事理を説かれてみると、元來淡泊な悟空のことゆゑ、怒りの解けるのも早い。

「それもさうだ。ぢや君の顔に免じて四の五のと言はないが、のう李元帥！俺と一緒に行つてくれるかね。」

「おう、行つてやるとも、忤と一緒に行つて三藏を救ひ出してやる。」

一同釋然と打解け、靈霄殿に參じてこの趣を玉帝に奏上した上、天兵を引連れて陷空山に馳せ向ふ。

無底洞の女怪は、けふこそ思ひを遂げることが出来ること、いそぐ支度をしてゐるところへ、表の

方に軍馬の嘶きが聞えた。怪しんで出て見れば、日頃畏敬する李天王、哪吒太子の兩父兄、馬上からはつたと睨まれたので、さすがの女怪も忽ちべしやんこ。ぶるく、慄へて地上にひれ伏したのを、太子は天兵に命じて搦め捕らせる。一方悟空は洞内を探つて三藏を救ひ來り、暫く物語りをした上、李天王父子の激勵の辭を後に、一行西へと出立しました。

## 滅法國に入る

### (一) おしやべり女將

頃しも仲夏梅雨の節、蒸暑い中を汗だくくで進んでゐますと、空中から善財童子が現れて、一行に呼びかけた。

「三藏様、御機嫌宜しう御座います——私は觀音菩薩のお使で參つたのですが、こゝから二三里先きに滅法國の城下が御座います。その王様が佛法が大嫌ひで、三年前一萬人の和尚を殺さうといふ願を立て、これまで千九百九十六人を殺しました。あなた方がおいでになると恰度満願の數になりますから、くれぐれも用心するようにと、菩薩からのお言傳です。では左様なら。」

女難を免れて來たかと思ふと、今度は法難だ。三藏は色を失ひ、戦々兢兢の態です。

「悟空、また大變な事になつたな。どうしたらこの國を通り抜けることが出来る？」

「さう御心配なさいませぬ。恰度日も暮れましたから、兎も角私が町に參つて様子を探つて參ります。みんなは此處で待つてゐて下さい。」

今度は火取蟲に變つて、町へ飛んで行きました。

火取蟲の悟空は、城内に入つて、一軒々々町家を覗き廻つてゐるうち、とある宿屋に、喰ひ酔つた客が七八人、素つ裸で寝轉んでゐるのを見つけた。悟空内心にはくそ笑みつゝ、中に入つて行燈の火を消し、本相に戻つた上、そこに脱ぎ捨てゝあつた着物や頭巾を、全部無斷で拜借に及び、急いで三藏等の待つてゐるところへ逃げて來ました。

「お師匠様、いゝ物を見付けて來ました。この町を通るのには、我々僧形では到底駄目ですから、その頭巾や着物をお召し下さい。そして伯樂だと言つて旅籠屋へ泊り、明日の朝早く出立すれば、誰も和尚だと勘付くものはありませんよ。さあ〜悟淨も八戒も早く着替へておくれ。」

法衣は行李の中にしまひ、四人とも俗人の風に變じ、白馬を牽いて悠々城内に入り、悟空を先頭にして一軒の宿屋へ入込んだ。

「今晚は——おかみさん、厄介になるぜ。」

「いらつしやあい。おやまあお四人様でいらつしやいますか、さあ〜お上り下さいませ。お竹や、

お二階の一番に御案内申し上げておくれよ。お松や、直ぐお茶とお菓子をお菓子は上等の方だよ、いゝかへ。」

女將は四十ばかりの、まだ水々しい姥櫻、とてもお世辭者です。入代り立代り茶だの煙草盆だのを持つて來る女中を見ると、皆お白粉をこて〜塗立てゝゐるのは、この女將、女どもに暗い穢ぎをさせて、金儲けをしてゐるのかも知れない。

「旦那方、よろこそお越し下さいました。失禮ながら何御商賣で、今日はどちらからお越しになりましたか。」

「私たちは北國の者で、商賣は伯樂ですよ。」

「それは結構な御商賣ですこと、さぞたんとお金儲けを遊ばすでせうね。そしてこれからどつちの方へおいでと御座いますか。」

「この先の町の馬市に出かけるんですがね。今日は一疋しか馬を連れて來ませんが、明日は六人の仲間が百疋ばかり引張つて、こゝへ來る筈ですよ。」

「まあさうで御座いますか。私のところは部屋も澤山ありますし、既も飼葉も充分御座いますから、皆さんがお泊り下さいませやうに……」

「えい、皆厄介になりますとも。それから旅籠は最上等に願ひませぬ。」

悟空がいゝ加減な法螺を吹くのを、女將は本氣にして、とんだ福の神が舞込んだと大喜び。やがて、飯も済んで寝る時刻になると、果して夜伽の女をすゝめに來ました。

「旦那、如何で御座いませう。いゝ女が大勢居ますが、お相手におよびになつては……」

「左様——よんでもいゝが、けふは私達の精進日だし、六人の仲間も來てないから、明晩みんな揃つた上で大いにやるとしませう。」

「さうで御座いますか。ぢや明晩は一つ大勢さんで、御陽氣にお遊びになつて下さいませ。」

悟空がうまい具合に斷つてくれたので、女を押し付けられては大變だと案じてゐた三藏は、ほつと安心しましたが、もう一つ心配なことがあります。

「悟空や、女の方は斷つてくれて安心したが、今夜寝てゐるうちに頭巾を落して、我々が和尚だといふことが判つては大變ぢや。何とか人に判らぬ眞暗な部屋に、寝かせて貰ふ譯には行くまいか。」

「さうですね、一つ頼んで見ませう——もしく女將さん、一寸來て下さい。あの私たちのうち二人は、疝氣が持病で風にあたるのが嫌ひだし、二人は眞暗なところでなくちや寝付かれないんですが、さういふ部屋はありませんかね。」

「さあ、困りましたねえ。私のところでは御覽の通り、涼しくつて見晴らしがいゝように建てたんですから、風のはひらない眞暗な部屋といふのは御座いませんが。ではどうでせう、下に大きな長持

が御座いますから、御窮窟でもあの中におやすみになつては……」

「それで結構、ぢや一つ案内して下さい。」

四人は荷物まで取りまとめ、階下の一室にある長持の中へはひつて、寝に就きました。

## (二) 宮中みな丸坊主

何しろ夏の眞つ最中に、四人一緒に長持の中に閉籠められたんですから、とても暑くて寝付かれません。悟空は寝られぬまゝに、故意と大聲で、出鱈目の獨言を言つてゐます。

「ふゝう、資本が五千兩に昨日の儲けが七千兩で、こゝに持つてゐるだけで一萬二千兩か。明日また馬を賣れば七八千兩にはなるし、しめて二萬兩は持つて歸れるわい。」

これは一つは、和尚と悟られないようとの魂膽から、獨り語を言つたんですが、恰度この家に泊り合せてゐた強盗團の耳にはひつたから、聞逃しては置かない。同類八人手分けして悉く家人を縛り上げ、長持を荒縄でからげてこれ幸ひと三藏の白馬に荷付けをし、どん／＼城外に向つて逃しました。長持の中の三藏等四人は、あつちへごろ／＼こつちへごろ／＼、蒸暑いよりも更に苦しいが、和尚がバレルと大變だから、聲を出す譯にも行きません。

やがて城門に差しかゝると、これを見つけた巡邏兵の一隊。  
「それッ、怪しの者だ、搦め捕れッ。」  
「わあー！」

と一齊にかゝつて来る。強盗の方でもこの近來の大儲けをフイにしてはと、必死に争ひましたが、衆寡敵せず、とう／＼馬を捨て、散り／＼に逃げうせてしまつた。

「隊長、賊がこんな大きな長持を捨て、行きましたか、どう致しませう。」

「さうだな。明朝陛下に奏上してから、開けて見ることにしよう。それまで役所にしまつて置け。」  
中にゐた三藏は、これを聞いて大恐慌です。

「これは大變だ。明朝開けて見られると、出家といふことが判つて、殺されるに違ひない。悟空や、どうかして助かる法はないだらうか。」

「さう御心配遊ばすな、私が何とか致して見ませう。」

金箍棒を錐に變じて、長持の底へ小さな孔をあけ、自分は羽蟻になつて外に這ひ出すや、急いで王宮に飛んで行つた。

時に夜は三更を過ぎ、廣々とした宮中も静まり返つてゐます。悟空は右腕の毛を捲り取り、これを數百の小坊主に變へ、金箍棒で捲へた剃刀を一挺づゝ持たせて、方々の寢間に放してやると、小坊

主どもは競争的に皆の頭を剃りはじめましたが、これより先き悟空は左腕の毛を抜いて數千の眼り蟲を捲へ、全部の人にたからして置いたから、誰とて目をさます者がありません。忽ちのうちに國王王妃はじめ宮中の男女一人残らず丸坊主になり、數百人の和尚と比丘尼が一時に現出する奇觀を呈しました。

悟空せゝら笑つて、小坊主や眼り蟲を元の毛に返し、長持へ歸つて来て一伍一什を報告します。

「明朝は面白いぞ、さぞ奴等はうるたへるだらうな。」

「はゝゝゝ、官女の坊主頭は奇抜だらう、一つ拜見したいもんだ。」

などと勝手なことを言つて喜んでゐる。國王は和尚征伐の發頭人だから、この報いは仕方がないにしても、側杖を喰つた家來や腰元こそ、飛んだ災難です。

さて翌くる朝、宮中で一番先き眼をさました王妃殿下、何だかいつもより頭が冷えるやうな氣がするるので、何心なく手をやつて見ると、こはそも如何に、こは如何に、くり／＼坊主の丸坊主になつてゐたから驚いた。わあつと泣出しながら、次の間に控へた腰元を呼び出すと、これもまた同じやうなくり／＼坊主。次ぎ／＼に出て来る腰元ども、どれもこれも坊主頭ばかりで、互に指さし合ひつゝ泣き笑ひをしてゐる有様は、氣の毒とも滑稽とも言ひやうがありません。

男の方も無論これと同斷で、宮中全部が俄か道心。冬瓜のやうなのもあれば、西瓜のやうなのもあ





(三) 強飯の誘惑

一同は二三日滞在してから、滅法改め欽法國を辭し、また數ヶ月の旅の後一つの高山に差しかゝりました。中腹に棚引く雲霧のたゞずまひ、何となく妖氣を含んでゐる様子なので、悟空は例の如く斥候をして見ると、果して崖の間に四五十名の妖怪が頑張つてゐます。

こゝで悟空が考へるには、今歸つてこの通り報告すれば、師匠はまた心配するに違ひない。これは一つ八戒を騙して、彼奴等と戦はせ、どれだけの手立があるかを試さして見ようと、何氣ない風をして歸つて来た。

「お師匠様、今日は私も鑑定違ひをしましたよ。向うに行つて見ましたら普通の村里で、廻國の和尚が見えたならば、お強飯を御馳走しようと、方々の家で炊いてゐました。あの霧と見えたのは蒸籠の湯氣で御座います。」

食ひしん坊の八戒は、さうと聞いてぢつとしては居れません。

「兄貴、ちよいと顔を貸してくれ——あのなにか、兄貴はその村で、強飯を食べて来たのか。」

「うん、食べて来たとも、油揚げや焼豆腐などのお菜もあつたし、とても美味かつたぞ。」

「うまくやりあがつたなあ——俺は空ッ腹で、一時も我慢が出来ないんだ。いまお師匠様の前を言ひつくりつて、御馳走になりに行つてくるから、お師匠様にはさう言つてくれるなよ。」

悟空は心中で、うまく計略に引かゝつてくれたわいと、ほくそ笑んでゐます。

八戒はいやに鹿爪らしい顔で、三藏に願ひ出た。

「お師匠様、今悟空の話によれば向うの村で齋を施さうですが、馬が疲れてゐますから、村へ行く前に飼葉を取つて来てやらうと思ひます。行つて来て宜しう御座いませうか。」

「それは八戒、いつになく殊勝なことぢや。では早く行つて草を探つて參れ、その後で齋を受けに行くとしてしよう。」

しすましたりと八戒は、一散に走つて人の見ない山蔭に行くや赤い舌をぺろり。小坊主に身を變じて、出鱈目なお經を唱へながら、村に向ひました。



妖怪の家來どもは、豫て大王の吩咐けにより、網を張つて待つてゐたところへ、のこ／＼八戒がやつて来たから、寄つてたかつて引立てゝ行かうとします。八戒先生これを招待に迎ひに来たものと勘違ひして、ぺこ／＼お辭儀をしてゐるから滑稽至極。

「どうも有難う御座います。なにさう引張らなくとも、御馳走になり参りますよ。今日は貴方がたの村で、齋をお施しになるんでせう。」

「何言つてるんだい、話が丸で反対だよ。俺たちの大將が貴様を捕へて蒸殺して喰はうといふんだ。」

「何ですつて、ぢや強飯を炊いてみると聞いて来たのは嘘ですか。」

さては悟空にだまされたのかと気が付いて、急に本相に還るや、熊手を揮つて猛然打つてかゝる。これには家來たちも吃驚敗亡、一目散に逃げ歸つてこの趣を報告しましたので、魔王は傍らのだん

びら押つ取り、直ぐ八戒のゐるところへ駆付けました。

「貴様だな、俺の家來を虐めたのは——一體貴様はどここの何者だッ。」

「俺の名を知らんのか、俺は唐の三藏法師の高弟猪八戒、字を悟能と呼ぶ豪傑ぢや。」

「さては三藏の門弟か、とうから貴様たちの来るのを待受けてゐた。今つかまへて喰つてやるッ！」

「なにをッ……」

熊手とだんびらで猛烈な一騎打が始まつた。

悟空は、悪戯半分で八戒を遣つて見たものゝ、容易に歸つて来る模様がないので、少し心配になつて悟淨にさゝやきました。

「悟淨、俺は八戒の阿呆をだましてやつたんだが、今に歸つて来ないのは、妖怪と戦つてゐるのかも知れない。こつそり行つて見て来るから、お師匠様には黙つてゐてくれ。」

一本の毛を抜き、假りの悟空を拵へてそこへ残し、本身は雲に乗つて山の彼方に行つて見ると、八戒は加勢の妖怪に取圍まれ、大たぢぢの態です。悟空雲の上から、

「八戒、しつかりやれ！ 應援に来たぞッ。」

と大聲で勵ましたので、八戒これに力を得て勇氣百倍、滅茶苦茶に熊手を振廻し、たうとう妖怪どもを追ひ散らしてしまつた。

悟空はこの有様を見届けた上、急いで三藏の側に歸り、假の姿は元に返し、素知らぬ顔をして坐つてゐる。そこへ八戒が汗だくく、息せき切つて歸つて来ました。

「お師匠様、どうも遅くなつて相済みません。」

「慌てふためいて、どう致したのぢや。飼葉も何も取つて来ぬではないか。」

「いやどうも面目次第も御座いませぬ。實は悟空に騙されたとは知らず、謙を申して強飯を貰ひに出かけたんですが、妖怪に圍まれて危ない目に遇ひました。それを兄貴に助けられてやつと歸つて来たので御座います。」

「お前は何を申してゐる？ 悟空は先刻からずつとこゝにゐて、何處にも参りはせんぞ。」  
「へえ、そんな筈はないが……ねえ兄貴、確かにお前来てくれたね。」  
とても怪訝に堪へぬ顔。悟空たまたま笑ひ出し、ありのままを明しましたので、三藏も悟浄も腹を抱へて大笑ひです。

「お前が餘り食ひしん坊なもんだから、俺が悪戯してやつたんだ。この埋合せにお前が先達になつて、この山を通り抜けるやう骨を折つちやどうだ。さうすると大手柄だぜ。」

「兄貴も全く人の悪いことをするよ——だが妖怪どもの腕前も知れたもんだから、一番兄貴の言ふ通りに、先鋒を承はるとしよう。」

おだてに乗せられ、眞先に立つてそこを出立しました。

#### (四) 三藏の贗首

八戒に負かされて洞中に歸つた魔王は口惜しくてなりません。聞けば八戒よりも強い悟空といふのがゐるとのこと、尋常の勝負では到底敵ひつこがないから、何かうまい計略もがたと家來に諮つて見ましたところ、一番智慧のあるのが、獻策に及びました。

「では分瓣梅花の謀計を用ひたら如何で御座いませう。それは家來の中で變化の巧い三人を大王の姿に變へ、別々のところに待伏せさせて置いて、向うの三人の弟子と戦はせるのです。その間に空中から大王が手を延ばして、三藏をお捉まへなさいませ。きつと成功致しませう。」

「如何にもこれは妙案ぢや、では早速取りかゝらせやう。」

腕利きの家來三人を、贗の魔王に變じさせ、山道に遣つて三藏等の來るのを待たせて置いた。

三藏の一行はそんなこととは知らずに、山を登つて來ると、道端から第一の贗魔王が飛出て矢庭に先頭の八戒に斬つてかゝる。八戒はこれと戦ひながら麓の方へ追ひかけて行つた後へ、第二、第三の影武者が躍り出て悟空と悟浄に挑み、各々離ればなれになつて戦つてゐるうち、本物の大王がそつと空中から手を延ばし、三藏を引ッつかんで洞内へ引揚げました。

三人はそれと相手の贗魔王を追拂つて歸つて來ると、白馬が悲しげに嘶いてゐるのみで、三藏の姿が見えないから大狼狽です。

「さあ大變だ！ これはきつと分瓣梅花の計略にかゝつたに違ひない。一刻も早くお師匠様をお救ひ申さなくちやならん。」

悟空が眞つ先になつて、彼方の谷間に駈付て見ると、石の扉いかめしく「陰霧山連環洞」といふ門札を掲げた洞窟がある。勢込んで突貫して來た八戒は、蠻力を振つて門を揺ぶるので、がた／＼ゆ

らゆら、今にも毀れさうな形勢です。

「大王様、一大事で御座います。今度は豚みたいな奴の外に、猿そつくりのがやつて来て、今にも門を破つて飛込んで来るかも知れません。」

「では、いよく悟空が攻めて来たのぢやな——家來ども、どう致したものだらう。彼奴に遇つてはとても敵對が出来ないが……」

と、魔王おろくく聲でみんなに相談を持ちかけると、例の分瓣梅花を獻策した小賢しいのが、しやりしやり出た。

「大王、私の智慧で奴等を追ッ拂つてお目にかけます。あんな愚か者をだますのは、わけは御座いませんよ。」

と豫て喰殺した死骸の中から、三藏に似寄つた頭を見付け出し、急いで髪を剃落した上、べたくく血を塗たぐつて門口へ持つて来ました。

「唐の豪傑方、さう亂暴せずとまあ一寸私の言ふことを聞き給へ。實はうちの大將が君方の師匠を連れて来ると、わけも知らぬ家來どもが、寄つてたかつ喰ひ殺してしまつたんだ。幸ひ頭だけが残つて居たので、今お返しするから、持つて歸つてゆくつりお葬ひをなさつたがい。」

と慟哭する。

「お師匠様、お情ない姿になられましたなあ。」

「あゝ、お悼ましう御座います。後に残つた我々はどう致しませう。」

さすが萬夫不當の勇士も、悲嘆にくれて全く正體がありません。漸くのことで兎に角三藏の首を埋葬しようといふことになり、向うの山影に持つて行つて、八戒が熊手で掘つた穴に埋め、草花などを供へて懇ろに供養致します。



しかし何時まで嘆いてゐたところが、三藏が生返る譯もない。悟空は拳固で涙を押拭ひ、憤然として立ち上つた。

「不倶戴天の仇はあの魔王奴だ。是非仇を討つてお師匠様の亡執を晴らさなくてはならんが、兎も角俺はあの洞窟を探つて来るから、お前たちはお墓を守つてみてくれ。」

と例の通り羽蟻に變じて連環洞に飛び行き、石門の隙間からくり込んで見ますと、一人の家來が魔王の前に出て、何やら奏上して居ります。

「申し上げます。大王様、お喜び遊ばすことが御座います。」

「喜びとは何事ぢや、早く申せ。」

「はッ、たゞ今裏山の方で泣聲が聞こえましたので、参つて見ますと、三藏の弟子どもが塚の前で泣き悲しんで居りました。多分彼奴等は贗首を本物と思つて、彼處へ埋めて塚を築いたので御座いませう。あの調子ではもう押しかけて来る勇氣もなさうですから、御安心あつてゆつくり唐の坊主を御賞味になつて宜しからうと存じまする。」

「左様か、それはよいことを教へてくれた——では三枚におろして中落ちと頭は荒煮に、脊の肉は刺身は、腿のロースはカツレツに揚げてくりやれ。」

ひどい王様もあつたもので、料理の指圖までしてあります。これを聞いた悟空は、さては先刻のは贗首で、師匠はまだ生きて居られるに違ひない。まご／＼してゐて料理されてしまつては一大事、是非探してお助けしなくてはと、方々飛び廻つた末、やつと臺所の側の物置に縛られてゐるのを見付けました。

「お、お師匠様、よく生きてゐて下さいました。」

「悟空か、早く助けておくれ。」

「お静かに、外に聞えると大變です——私は一寸妖怪どもの様子を見て来て、それからお救ひ致しますから、暫くお待ちなすつて下さい。」

直ぐ座敷の方へ飛んで行つて、佛の眠り處をこしらへ、魔王以下一同の籠に放してやると、忽ちぐうぐう眠りだし、鼻から提燈を出すもの、だら／＼涎を流すもの全くだらしがありません。悟空はこれを見済して三藏のところへ飛歸り、本相に戻つた上繩を解いて助け出し、とも／＼舊のところへ歸つて來ました。

遠くからこれを見た八戒は、驚いてブル／＼。

「わあ、ッ、お師匠様の幽霊だ、迷つておいでになつたッ！」

「馬鹿を言ふな！ 御師匠様は實は殺されてはゐなさらなかつたのだ。」

悟空は八戒を叱り付けて置いて、三藏の首と見たのは替玉であつたこと、洞中の魔王等を悉く眠らして來たことなどを物語ると、八戒聞きも終らず、塚から贗首を掘出し、熊手を揮つて粉微塵に叩き潰したのは亂暴な奴です。

悟空と八戒は、それから再び洞内に行つて見ると、一同相變らずぐう／＼寝込んでゐます。八戒かうなると大威張りで、眞先に魔王を殴り殺せば、これなん年古りたる豹の精。その他の家來眷屬は、一々手を下して殺すのが面倒なので、柴に火を付けて蒸し焼きにし、眠りながらの極樂往生をさせて引揚げました。

この近郷の人々は、永年こゝの妖怪に苦しめられてゐたのですから、全滅と聞いて大喜び。どうぞ

私たちの町へ、私の村にもと競ひ合つてもてなさうとするのを、やう／＼振切つて出立する。間もなく通りかゝつた鳳仙郡では、三年間旱魃で苦しんでゐたのを、悟空の法力で雨を降らせ、次々と善根を施していよ／＼天竺國の一部なる玉華州に足を入れました。しかし同じ天竺國でも、目的の大雷音寺までは、まだ大分ありますから容易なことぢやありません。

## 天竺玉華州

### (一) 三王子が門弟に

一行は日ならず王城の地に入り、三人を旅館に残して置いて、三藏一人宮中に伺候し旅券の査照を願ひ出る。元來この州の王は天竺皇帝の親族に當り、佛道を尊び人民を愛し、名君の聞え高い方ですから、三藏が遙々經を求めに來た由を聞いて、心から感動遊ばされた。

「それは本當に奇特なことぢや。して、大唐國よりこゝまで何年かゝられたな。」

「左様、國を出てから今日まで、十四遍の夏冬を迎へまして御座います。」

「では十四年の長い月日ぢや、嘸かし途中いろ／＼の目に遇はれたであらうの。そのやうな長旅に、貴僧は一人の從者も連れては來られなかつたのか。」

「いや、三人の弟子を連れて居りまするが、宮中には恐れ多いので、旅館に止め置いて御座ります。」

「それは無用な遠慮ぢや——これ／＼誰か旅館に遣はして、その三人をこゝへ招いで參れ。」

お召を受けた悟空等三人は、侍從に導かれて、參内致しましたが、何しろ揃ひも揃つて恐い顔の男ばかり。國王色を失つて座を立たれようとしたのを、三藏が譯を言つておとよめしたので、漸く安堵遊ばされ、別室に膳部を設けていろ／＼とおもてなしになります。

この國王には三人の王子があつて、ともに生れつき武張つたことが大好き。この日、異形な和尚が來て、父陛下を驚かしたといふ話を聞き、萬一怪しの者ならば、取ツ捉まへて目に物見せてくれんものと、皆が飯を食つてゐるところへ押しかけて來た。

「これ／＼、そこの和尚、お前の弟子はあれは人間か妖怪か？ 眞直に實を申せ。」

「はい、私は唐の三藏と申す出家、三人の門弟は顔形こそ醜く御座いますが、精神は皆立派なもので御座います——したが、我々を訊されるあなた方は、一體どなたで御座いますか。」

「うん、わたちはこゝの王子だが、怪しい和尚が來たと聞いて調べに參つたのぢや。」

三人はそれ／＼携へて來た得物を振つて、威勢を示さうとします。大食漢の八戒は最後まで残つて御馳走を貪つてゐましたが、この時漸く箸を置いて、

「は／＼／＼、これは面白い。二番目の王子様は熊手をお使ひになりますね、私も同じやうなのを持

つてゐますから、一つお目にかけてませう。」

と、腰にさげた小さな熊手をはずし、ふうつと息をかけて一振り振れば、長さ一丈あまり、酉の市にでも行つたら、五六十圓には吹ッかけられさうな大熊手となつたので、驚いた三王子は覺えずたちたちと後退りをされます。

悟空も、第一王子が棍棒を持つてゐるのを見て、耳の中から例の如意棒を取出し、忽ち長さ一丈五尺餘、ビール瓶ほどの太さに變へ、

「さあ、これをお兄い様に進上しませう、お持ち歸り下さい。」

と、片手でちよいと差出したので、第一王子は走り寄つて持上げようとしたが、一分一厘も動かばこそ。これを見た氣短かの第三王子、かつと疝積を起し、棒を振廻していきなり悟淨に打ちかかる、發止と受け止めた降妖杖から、忽ち爛々たる光が送り出で、眼が眩んでどうすることも出来ません。

氣を負つた三王子も、こゝに至つて遂に閉口頓首。

「我々兄弟みな眼がないので、ついさまぐの失禮を致した。この上はどうか武藝を使つて、我々に見せて下さい。」

誠心面に溢れて懇ろに頼みます。悟空怒々と一丈五尺の大鐵棒を取上げ、

「宜しう御座います。ですがこゝは狭くていけませんから、空中に於て充分なところをお目にかけてやせう。」

と、ひよいと五十メートルばかりの低空に飛上り、えいッ！と一聲、氣合をかけて、棒を使ひはじめる。その有様は、「一上一下、右に旋り左に轉じ、宛ら黃龍轉身の勢ひ、初めは人と棒と錦上花を添ふるに似、次には人の姿を見ず、たゞ一天棒の躍るを見るのみ」と、いふんだから大したものです。

八戒と悟淨は、しばらく下で見物してゐましたが、たうとう堪らなくなつて同じく空に飛上り、一緒になつて熊手と寶杖を使ひ始めました。この方は「上三下四、左五右六、前七後八、丹鳳朝陽、餓虎撲食の勢ひを示し、たゞ見る満天に瑞氣氤氳、金光縹緲として、天將神兵一時に武を演ずるかと思ふ」といつたやうな壯觀。

國王を初め宮中の大官小吏、さては城内の町人百姓男女僧俗、悉くこれを仰いで感嘆措く能はず、拍手喝采の聲は文字通り天に轟くばかりです。三人はいゝ氣持になつて、半時あまりいろくな型を演じた上、相携へて空中から下りて來ました。

今まではどの乞食坊主かと、内心蔑すんでゐた宮中の役人どもが、眼のあたりこの奇瑞を見て、がらり應待振が變つたのも實際無理ぢやありません。

(二) 武器を攫はる

三人の王子は、心からその妙技に感服し、その場で懇ろに入門の儀を申し込んだ。

「どうか暫くこゝに滞在して、我々に武藝の奥儀をコーチして行つて下さい。お禮は父上に願つて、お望み通りいくらでも差上げますから……」

「さうですか——私どもは決して謝禮などは戴きませんが、眞から稽古になりたいとあらば、お教へ致しても宜しう御座います。兎に角貴君方に力をお授けしますから、ちよつと此方へいらつしやい。」  
悟空は三人を別室に連れて行き、眞言祕密の咒文を唱へながら、ふうつと息を吹ツかけると、いづれも元氣百倍。大喜びで表に立出で、それ〴〵如意棒その他を持上げて見れば、先刻は一寸も動か  
なかつたものが、何の苦もなく振廻せます。

しかし年の若い三人には、このまゝでは若干目方が重過ぎるやうです。そこで俄かに宮中に鍛錬所を設らへ、三つの武器を見本に、それ〴〵斤數の軽いものを作ることに成り、召し出だされた鍛冶師は、夜を日についで鑄造に取蒐りました。

さて、この王城の北方七十里、豹頭山虎口洞と呼ぶところに、妖怪の王が住んでゐましたが、ある晩玉華城の方角に煌々たる光を認め、怪しんで飛んで来て見ると、鍛冶工場の中に鐵棒と熊手と寶杖が立て掛けてある。

「は、あ、これがあの光を出したのだな。誰の知らないが、何しろ美事な武器だ。幸ひ四邊に人はなし、兎に角失敬して行かう。」

一總めにして盗んで行つたのを、翌朝になつて初めてそれと氣付いた鍛冶師、蒼くなつて方々を捜したが見當らない。恐る〴〵この趣を王子に上申すると、王子たちも驚かれたが、仕方がないから打揃つて悟空等の許へ詫びに來ました。

「孫先生、何ともはや申譯のないことが出來しました。昨晩何者かあの工場に忍び込み、先生方の武器を悉く盗まれたのです。役人どもに吩咐けて八方捜査致して居りますが、未だに何の手掛りもありません。」

「ふうむ、それは不思議千萬。この宮中は他所からはひれるところでなし、殊に普通の人では動かすことも出來ぬ武器を、三本も一緒に持つて行くとは——殿下、これは普通人の仕業ではないと思ひますが、この近所に妖怪の住家は御座いませんか。」

「あります〴〵。我々はこれまでつい見たことはないが、北方の豹頭山虎口洞に、黃獅といふ妖怪がある」と聞いてゐます。」



「さうですか、ぢや盗賊はそれに違ひありません。これから私が行つて見て参りませう。」  
如意棒を持たなくては恰好がつかないが、仕方がないから手ぶらで雲に跨がり、豹頭山の麓に行つて見ると、山の上から狼のやうな顔をした二人の小者が、何か大聲で話しながらやつて來ます。  
「二狼よ、昨夜大將が取つて來た寶物といふのは、とても大したものらしいぜ。今日の御披露會には俺たちにも見せて下さるさうだし、お祝酒も下さるさうだから、暫く振でうんと飲めるわい。」  
「さうだとも。だが一狼兄貴、預つて來た二十兩の金で、みんな豚と羊を買つて歸るのは馬鹿らしいから、五兩ばかりくすねて山分けにしようぢやないか。なあに、この頃その物價騰貴だと言やあ、わかりつこはないよ。」

「よからう〜。金儲けの上、口ハ酒の御馳走か、占め〜。」

これを聞いた悟空、物蔭に待受けてゐて、不動金縛りの法をかければ、二人は忽ち棒のやうに堅くなつて打倒れ、たゞ目をばちくりするばかり。これをそのままにして置いて、悟空は急いで王城に歸つて來た。

「八戒に悟浄、俺と一緒に化物退治に行つてくれ〜それから陛下にお願ひが御座います。謀事の種に使ふんですから、豚と羊で都合十五頭買ひ求めて下さいませ。」  
國王は役人を町に遣はし、直ぐ註文の動物をととのへて與へたので、三人でこれを引ッぱり、雲に乗つて再び小者の倒れてゐるところへ飛んで來ました。



悟空は二人の着物を剝いで、一方は八戒に一方は自分が着た上、容貌體格ともそっくり一狼二狼の姿に變じ、なほ悟浄をば商人風に打扮させて、虎口洞へと立向う。金をくすねようとしたばかりに、こんな目に遇ふとは、二人の下郎こそいゝ面の皮。どこかには何拾萬圓とごまかしながら、大きな顔をしてゐる政治家が澤山あるのに……

一同何喰はぬ顔で洞窟に來ると、先刻から黃獅が待ち兼ねてゐます。

「一狼に二狼、戻つて來たか。そして何頭求めて参つたな？」

「はい、豚が八疋で十六兩、羊は七疋で九兩、しめて二十五兩で五兩不足しましたから、その商人を連れて参りました。これでも私等二人が掛け合つて、大分負けて貰つたので御座います。」

「いやそれは御苦勞だつた。ぢやその商人を中に入れて、一杯飲ましてやれ。」

してやつたりと三人は洞内にはひつて、四邊をきよろ〜見廻せば、果して一室に三つの武器が飾つてあります。八戒これを見て直ぐ本相を現はし、土足で駈込んで熊手を取出したので、悟空と悟浄も續いて自分たちの得物を奪還し、一度に表へ飛出したから、黃獅先生驚いた。

「泥坊々々、こら貴様たちは一體何者だッ！」

「なにッ、貴様こそ人の物をちよろまかした、こそ泥ぢやないか——唐の豪傑猪剛鬣の熊手を喰つて、くたばつてしまへッ」

八戒を眞先きに三人が打つてかゝるを、黄獅は青龍刀で暫くは渡り合つたが、形勢不利と見て東南の方へどん／＼逃げ出す。一同長追ひせず、後に残つて慄へ上つてゐる小化物を塵殺しにした上、洞内を焼拂つて玉華城に凱旋しました。

黄獅ははう／＼の態で、祖父九靈元聖の住む竹節山盤桓洞に落ち延び、前夜來の一條を物語つて援兵を頼み込みます。

「——折角盗んだものを取返され、その上ひどい目に遇はされて、私は残念でなりません。お祖父さん、どうか手傳つて讐を討つて下さい。」

「左様か。お前は彼奴等知らんだらうが、なか／＼尋常な奴ぢやない。豚のやうなと色の黒いのは左程でもないが、あの猿面の悟空といふ奴は大した神通力のある奴ぢや——よし／＼、俺が自身で出かけて退治してやらう。」

當の黄獅をはじめ白獅、紅獅、綠獅、紫獅、褐獅、藍獅などの七人の孫たちを引連れ、威風凜々として進發する。

玉華城では、突然辰巳の方から腥さい風が吹いて來たので、驚いて天を仰ぎ見ると、遙か彼方に妖怪の大軍が押し寄せて來るのが見えたから、國王はじめ氣が氣であります。しかし、悟空は平氣なもの。

「陛下、御心配なさいませぬ。あれは黄獅の奴が、祖父の九靈を加勢に頼んで來たのでせうが、あんな老ぼれは何でもありません。我々三人で行つて、取ツつかまへて來ます。」

八戒悟淨とともに、雲に乗つて城外に走り出で、來れ討たんと待ち構へてゐます。

いきり立つて來た先鋒の黄獅は、三人の怨敵を認めましたが、今度は九靈といふ後楯があるから氣が強い。

「やい、豚に猿に黒ん坊！先刻は勝を譲つてやつたが、もう貴様等に負けはせんぞ。おとなしく降参致すか、但しは尋常に勝負するか、二つに一つの返答致せ。」

「なにを猪口才な盗ッ人奴。この八戒が熊手を喰はぬうち、消えて無くなれ、カツカツ／＼／＼泥ライオン！」

雙方得手勝手な臺詞を列べ立て、喧嘩をおつ始める。かくと見た六人の孫獅精、各々得物を揮つて駆け付けて來たので、これは悟空悟淨が引き受け、こゝに七ライオン三坊主の大亂闘が展開されました。

九靈元聖は後陣に在つて、暫く戦ひの有様を眺めてゐたが、やがて黒雲に乗つてそうつと城内に飛んで行き、矢庭に國王父子と三藏を引つ攫つて、また此處へ歸つて來た。しかし三人は夢中で戦つてゐるので、誰もこれに氣が付きません。

### (三) 老妖九頭獅子

元來九靈は九頭獅子の精だから、五つの口で五人衛へて來ても、まだ四つ餘つてゐる。使はずに空けて置くのも無駄なこと、彼か此かと物色したが、悟空と悟淨は輕敏で攫ひさうがないので、一番鈍重な八戒に見當を付け、さつと飛降りて衛ひ上げるや、残りの口で大音聲——

「孫ども引揚げろツ。この通り六人を捕虜にしたぞ。」

悟空驚いて天上を見れば件の有様。さては老ぼれに謀られたるよなと、急に身外身の法を使ひ、一掴みの毛を數百の小悟空に變じて、孫獅精等をおつ取り圍み、たうとう黃獅を打殺し、残りの六人を生捕りにして引上げて來た。

城内の文武百官は、蒼くなつて大騒ぎの最中です。

「大變です。陛下と殿下と和尚様が妖怪に攫はれました。どうぞ早くいらしつて救つて下さい。」

「さう心配なさるな。こつちも彼奴の孫を六人人質に取つてあるから、滅多に陛下方を殺すやうなことはありません。これから寛り支度をして、必ず皆様を救つて來ます。」

先づ六人の捕虜を鐵の牢に差し籠め、充分、腹拵へをしてから、悟淨とともに盤桓洞にと馳せ向ふ。九靈は二人が逆襲して來たといふ歩哨の報告を受け、門外に待ち伏せして難なくぱくりと衛へ捕つたが、これは寧ろ悟空等の思ふ壺、かうして捕まつて置いて、味方を救ひ出さうといふ計略なのです。

九靈はそんなこととは知らないから得意満面。

「はムム、小わつば奴、俺様に遇つちや敵ひつこはあるめえ——したがあの孫どもをどう致した、白狀致せツ、言はぬとかうだぞ。」

柳の鞭でぴしり／＼二人の頭をひつ叩いたが、いづれも石頭の法を使つてゐるから、平氣の平左で何處を風が吹くといつた顔。九靈も呆れて、

「まあいゝわ、今日は大分草臥れたから、明日ゆつくり懲らしめてやらう。」

と、二人を嚴重に縛つた上見張の番兵を付け、腰を叩き／＼臥戸に入りました。

その夜半、悟空は豫ての計畫通り、繩抜けの法を行ひ、皆を助け出さうとして居るところを、うっかり番兵に見付けられた。がや／＼騒ぐ物音に九靈おつ取り刀で出て來たので、悟空はまた捕ま

つてはこと面倒と、一旦洞外に逃れ出る。何しろ相手が九つも頭のあるシレ者で自分の本陣に居るのに、こつちは單身敵城に入つてゐるのだから、仕事は容易ぢやありません。

そこへ恰度来かゝつたのはこの近邊の氏神、悟空を認めて呼びかけました。

「貴方は唐の悟空さんでせう。昨日からこの界隈は大分騒々しいが、どうかなすつたんですか。」

「いや實は、玉華州の王様や俺の師匠などを攫はれて弱つてゐるところだ。一體あの九霊といふ爺

いは何者だね？」

「あれはもと救苦天尊が乗つてゐられた獅子ですが、數年前下界に降つて妖怪になつたのです。一筋縄ではいかぬ奴ですから、天尊にお願ひになるのが一番ですよ。」

「さうか、いゝことを教へてくれた。さう言はれると、救苦天が九頭の獅子に乗つてゐられたのを見た覚えがある。ぢやこれから行つてお頼みしよう。」

舳斗雲に乗つて東天の妙巖宮に天尊を訪れ、前日來の一件を事細かに訴へ出た。天尊は獅子が居るものとばかり思つてゐたから、驚いて獅子小屋に行つて見ると、果して藻抜けの殻で、番人の男は眠さうな眼をこすりながらうろ／＼して居ります。

「これ／＼、お前は獅子の番をしてゐながら、どう致したのぢや。」

「これは天尊様、何ともはや申譯も御座いません。實は先日御殿で盗み酒を致しましたところが、そ

のまゝ何も知らずに今日まで酔倒れてゐた間に、逃げられたものと存じます。どうか御勘辨なすつて下さいませ。」

酒で十圓札ぐらゐを吹つ飛ばすのは、カフエーなどにも澤山居るが、此奴は本物の獅子を逃がしを

つた。  
「怪しからん奴ぢや。あの酒は太上老君からの贈物で、飲めば五六日は醒めない名酒ぢや。これから捕まへに參るから一緒に躓いて參れ。」

悟空と三人で東天門を立出で、下界に向はれました。



程なく三人は竹節山に到着。誘き出し役の悟空が洞門をがたつかせながら、散々に悪口を列べ立てると、九霊は怒氣満面、九つの口を張り開いて猛然躍り出した。天尊はつたとこれを睨み、

「これ九頭、わしが參つてゐるのに氣が付かないのかッ。」

御聲も鋭く叱り付けければ、忽ちへたく／＼と地上に蹲まり、まるで他愛がありません。獅子番の男はその側に駈寄つて、

「こん畜生、貴様が黙つて逃げあがつたので、おいらウンと叱られたぞ。」

ピシヤ／＼拳骨で殴り付け、持つて来た錦の鞍をかけると、天尊はひらりこれに跨り給ひ、悟空の拜禮裡に東天に歸らせ給ふ。

悟空は直ちに洞内に入つて一同を助け出し、小化物を打殺した上、打揃つて玉華城に引揚げる。案じてゐた官民の喜びはもとより、國王父子は一行を命の親とあがめて、下にも置かぬ歡待ぶりに、さすがの八戒も胃弱を起すくらゐ。なほ國王は悟空の進言により、捕虜になつてゐた獅精どもの皮を剥ぎ、肉は悉く城内に配給しましたので、人民一同初物のライオン鍋を賞味することが出来、自然一行の徳望は高まるばかりです。

そのうち例の三武器も鑄上つたので、三人からそれ／＼王子達に秘術を傳へ、一月あまり滞在した後、引止めるのを振切つて進發、再び旅路に上りました。

#### (四) 佛體は油泥坊

次で差しかゝつたのは金平府と呼ぶ大きな町、一行は慈雲寺といふに宿を求めて、こゝに一泊することゝなつた。折しも恰度孟蘭盆會に當り、町家では皆燈籠を掲げ、迎ひ火を焚き、往來は見物や佛參の人で押返すやうな賑ひです。

殊に土地の名所になつてゐる金燈橋の大燈籠は、他所では見られぬ壯觀と稱されてゐます。

三藏等は慈雲寺の和尚にさそはれ、話の種にもと、打連れて見物に出かけましたが、まつたく噂に聞くより見事なもの。高さ五丈に餘る三基の燈籠は、内側を瑠璃板で張り詰め、周圍に燦爛たる金絲を繞らし、皎々たる光は満月を欺き、なんとも言へぬいゝ香氣が四方に漂つてゐます。八戒は鼻びくびく。

「ほう、これはとてもいゝ匂ひだ——慈雲寺の和尚さん、どうしてあの油はこんなに匂ふんです？」

「あれは御存知ないでせうが、他國にはない値の高い油です。一斤が三十二兩で、三つの燈籠に千五百斤四萬八千兩といふ莫大な油を費ふんですよ。」

「それはまた途方もない不經濟な話だ。たつた一晚でどうしてそんなに澤山の油が要るんですか。」

「それですよ。まあ見てゐて御覽なさい、もう暫くすると何處からか三つの佛體が現れて、それと同時に燈籠の火が暗くなり、油はすつかり無くなつてしまひますから……」

「へーい、ぢやその佛が油を甜めてしまふんでせう。」

「さうかも知れませんが、何にしてもこの燈籠を上げないと、その年はきつと凶作ですから、仕方なく油問屋が犠牲になつて、毎年々々この燈籠を納めるんです。」

案内の和尚とこんな話をしてゐるうち、遠くの方からドツツといふ風の音。數萬の見物人はこれを

聞くや、逃げろ〜と喚き騒ぎ、先きを争つて八方へ逃げ去つてしまつた。  
悟空たちも何事か判らないけれども、兎に角こゝを立ち去らうとしましたが、三藏はいつかな背きません。

「お前たちは間違つたことを言ふ。わしは平常から佛を拜まうと心がけてゐるのだから、こゝにゐてお待ち申してゐる。」

と、却つて橋の上に進み出た時、風は一層強くなり、その風の中から得態の知れない三個の佛體が現はれた。悟空はくり〜眼を一層大きくして凝視すると、確かに怪しい奴です。

「お師匠様。それは妖怪です。早くこつちへおいでなさい。」

と呼びかけるが否や、燈籠の火が一時に暗くなり、空中からよろろ太い手が出て三藏の首筋をつかみ上げ、何處へか飛去つてしまつた。

一同の驚愕は、鳶に油揚を攫はれたところの騒ぎぢやありません。たゞあれよくと狼狽へるばかりでしたが、悟空はきつと身繕ひして立上りました。

「みんなは寺に歸つて荷物と馬の番をしてくれ。俺は追ひかけて行つて何とかしてくる……」  
言ふが早いか筋斗雲に飛乗り、腥さ風の後をつけて、東の方へと眞つしぐら。

妖怪もこれに氣が付いたか、煙幕戦術を用ひ、眞黒な雲を空一面に吐き出したので、流石の悟空も濃霧に包まれた飛行機同様。仕方がないからある山の上に着陸し、何としたものかと思案投首の所へ、折よく地方巡察の役人が通りかゝつた。

「あなたは唐の齊天大聖では御座いませんか、こんな山の中で何を考へていらつしやるのです？」  
「實は三人の妖怪に師匠を浚はれたので、こゝまで追ひかけて來たが、見失つてしまつて、弱つてゐるところだ。」

「それぢや、何でせう、この山續きの青龍山依英洞に住む辟寒、辟暑、辟塵の魔王兄弟でせう。」  
「ふう、まるで別荘地みたいな名の奴等だな。一體奴等は何者だね。」

「素性はよく判りませんが、油が大の好物で、毎年盂蘭盆には佛體に化けて金平府の人民をたまし、一年分の食糧を捲上げてゐるのです。早く行つて救つて上げないと、お師匠様が天鈇羅にされてしまひますよ。」

「揚げられてしまつちや大變だ——では行つて來る、左様なら。」  
急いで依英洞に駆付け、門外から破鐘のやうな聲で罵る。

「おい師匠を返せ！ 返さぬと塵殺しにしてしまふぞッ。」  
この時、洞内の三魔王は、三藏の料理に取かゝらうとしてゐたが、この聲を聞き付けて三藏に聞き

ました。

「こら坊主！いま表で騒いでゐるのは貴様の何だッ。」

「あれは齋天大聖孫悟空と申します弟子で御座います。私は天竺へ經文を授かりに參る者で御座いますから、どうぞ命を御助け下さいませ。」

「フーム、その悟空といふのは、いづぞや天界を騒がせたとか噂のあつた奴ぢやな。まだ外にも從者が居るのか、眞直に申せ、命を助けて遣はすから……」

「はい、外に天蓬元帥猪八戒と、捲簾大將沙悟淨と申す二人も居ります。」

三藏は成るだけ俸さうに言つて、相手を恐がらせようと致しましたが、三魔王はびくともしないばかりか、却つて大喜びです。

「は、は、それはトンだ景物がやつて来てくれたわい——兎に角この坊主は縛り付けて置いて、その三人を捕まへて来た上で、一緒に料理して喰はう。猿や豚の天麩羅も變つてゐてオツだらうぜ。」

三人揃つて表に躍り出し、眞赤になつて力み返つてゐる悟空に嘲罵を浴せます。

「チーンだ、貴様が評判に聞いた悟空か。まるで猿芝居にでも出るやうなチツポケな奴ぢやないか——一體お前は何か貰ひたくてそこに立つてるんだい？」

「おのれ失禮な油泥坊め。問答無益ぢやッ。」

ビュー——如意棒を振廻して來るのを、三魔王は斧と大刀と鎗で立會ひ、火花を散らして戦ふこと

百數十合。そのうち後陣に控へた魔王の家來が加勢に出て、悟空を取圍んだので、さすがに衆寡敵せず、雲に乗つて一旦慈雲寺に引返しました。

急報に接した八戒と悟淨は、悟空と共に再び伎英洞に押しかけたが、斯くあるべしと豫期してゐた三魔王が、更に數千の家來を繰出して邀撃したので、八戒悟淨の兩人、腑甲斐なくも遂に生捕られてしまつた。

悟空は口惜しくてならぬが、唯一人では何とも致し方がない。かなはぬ時の神頼み、近頃度々天上界へ無心に行くので、チトきまりがよくないけれども、もう卒業も間近のことだし、親父が何とか始末してくれるだらうと見込を付け、今度は直接に天上玉帝の許に願ひ出ました。

### (五) 四木星神の應援

玉帝願の趣を聞かれて應援を命ぜられたのは、星辰二十八宿中の猛者なる角木蛟、斗木獬、奎木狼、井木犴の四木星神です。悟空が案内して青龍山に到り、例によつて滅茶苦茶に罵詈謗を浴せると、三魔王は大勢の家來を連れて、勢鋭く躍り出しましたが、四木星の姿を見て一縮み。「やあ、我々の苦が手が來た。」

と本相の犀に變つて一目散に逃げ出す。悟空は角木蛟、井木犴とともに、逃がさじものと疾風の勢ひで追ひかけて行く。

残つた斗木獬と奎木狼は、小化物どもを谷間へ追詰めて塵殺しにし、洞内から救ひ出した三藏等を慈雲寺に送り返した上、すぐまた悟空の應援に出かけます。應援隊も並大抵な骨折ぢやありません。間もなく西海の空に来て見ると、海邊の斷崖の上に、悟空が眼をギョロつかせながら、頑張つてゐます。

「大聖、今三藏法師たちを救ひ出して來ましたが、あの妖怪はどうしました？」

「有難う〜〜彼奴等が海の中に逃げ込んだので、井角二星が追ひかけて行きました。私も行つて來ますから、どうか此處で待つてゐて下さい。」

ザンプとばかりに飛込み、浪切りの法を使つて、海底へ行つて見れば、追つ詰められた三妖は死に物狂ひになつて合戦の最中。そこへ悟空までやつて來たので、驚いて再び崖へ逃上らうとするのを、奎斗二星が待構へてゐてこれを挟み撃ちにし、とう〜三疋とも打殺してしまひました。

悟空は犀の角を取つて、そのうちの四本を記念として四木星へ、残り二本を慈雲寺と金平府知事に贈りましたが、何しろ犀角といへば稀代の珍薬ですから、いづれも大喜びです。妖怪全滅と聞いた府民は、一行を救世の生神様と崇め、競うて慈雲寺へ禮拜に來るといふ有様。中にも二百四十軒の油

問屋では、これから毎年、數萬兩の損をせずに済むのも、皆和尚様方のお蔭だとあつて、一日宛代る代る接待するやうに申合せ、何としても放してこれません。

三藏は心ならずも、一ヶ月餘りこゝに滞留しましたが、ある晩窺に、悟空を招んで相談をかけた。

「悟空や、わし達は引留められるまゝに、便々とこんなところで暮してゐては、何時天竺に行き着けるか判らない。仕方がないから今夜コツソリ抜け出して、旅立たうと思ふが、どうぢやらうの。」

「ハイ、私もとうからさう思つて居りました。では早速支度致しませう〜オイ八戒々々、早く起きて馬を引き立てゝ來てくれ。」

八戒は寢惚け眼をこすり〜起きて來たが、この話を聞いて大不平です。

「一體どうしたといふんだ。まだやつと三十軒ばかりの御馳走にしかなつちや居ないぜ。何もこんなに早く出かけて、わざ〜飢しい思ひをしなくたつてい〜ぢやないか。」

「何だと、この阿呆奴。言ふことを背かないんなら、如意棒でブン殴つてやるぞッ。」

「ア、御免だ〜。行くよ、行きますよ。」

不精無精に馬の支度をして、四人コソ〜夜逃と出かける。借金を拂ひ兼ねてなら兎に角、御馳走が食ひ餘つての夜逃げは、八戒でなくともチト變です。



天竺二人王女

(一) 荒園に泣く姫

金平府を立つてから半ヶ月ばかりで、舍衛國の布金禪寺といふ大きな寺に宿を求めた。

この寺は、もと給孤獨園寺と言つたが、信心深い村の長者が、釋迦如來をお招ぎして、經文の講義を聞く折に、地上一面黄金を布いたところから、布金寺と名を改め、寺の後には釋迦のために求めた祇園があるといふ由緒の深い禪寺。住職は百歳にも餘るかと思ゆる、白い眉の、柔和な相をした老僧で、三藏が唐からはるく經を求めに來た由を聞き、心から感に入つた様子で、いろくんと歡待致します。

ともに佛の道にいそむ老住持と三藏は、自然話がはづんで、夜遅くまで一室で物語をしてゐましたが、三藏は不圖庭の彼方から、物悲しい泣聲が傳はつて來るのを聞き付けました。

「お住持様、あの泣き聲は何者で御座いませう。あなたにはお聞えになりませんか。」

問はれて老僧は、少時沈吟してゐましたが、やがて歎息しながら、  
「あれは實に可哀さうな女なのです。外ならぬ貴僧のことゆゑ、お話し致します。まあお聞きなす

つて下さい。」

と前置きして、女の身の上につき長物語を始めた。

「恰度去年の今月今夜のことでした。愚僧が椽に出て月を眺めて居りますと、祇園の方に當り、人の泣き聲が聞えます。不思議に思つて行つて見たところが、若い女が打倒れて居るではありませんか。驚いて譯を聞きますと、女は天竺國王の姫君で、その晩御殿で月を賞してゐるうち、突然吹いて來た風に攫はれて、空に捲上げられ、フト氣が付いた時は、見も知らぬこの草原に捨てられて居るので、餘りの恐さ悲しさに泣きくづれてゐたのだとの話です。無論愚僧はいたはつて連れて參りましたが、寺の中とは言ひ條、若い女を置いては何かの間違ひが起らぬとも限りません。仕方なく和尚どもには、愚僧の法力によつて捕まへた妖怪だと偽り、一室に閉ち籠めてその夜を過させましたが、さて翌朝になると、不思議とも何とも言いやうのないことが起つたので御座います。」

老僧はこゝまで話してから、氣を落着けるやうに、グツと唾を呑み込んでまた語を續ける。

「——それはかりなのです。翌朝この趣を奏上するために、早速參内いたしますと、驚いたことには、前夜の女と年恰好、顔かたち、全く瓜二つな姫君が、宮中にも居られるのです。さては助けた女が怪しいと思ひましたから、何事も申上げずにそのまま寺に歸つて、それとなく宮中の様子を聞いて見ましたが、少しも違つたことは御座いません。愚僧も眞偽を判じ兼ねるまゝ、その後、ズーツと食

を興へて、早今日で満一年留め置きました。が、女も利口者で、晝の内は譯の判らぬ譚語を言つては妖魔の風を装ひ、夜人の静まつた頃になると、両親のことを思ひ出して、あのやうに泣くので御座います。——貴僧は年こそ若い、こゝまでおいでになる間にでも、永年の修業を積まれた方ですから、何とか法力をもちまして、いづれが眞か偽かをお見現はし下さる譯には行きますまいか。何せ相手は雲上人のことゝて、愚僧も一年の間、全く困り抜いてゐるので御座います。」

聞けば如何にも奇怪至極な話。正を助け悪を矯める佛家の身として、このまゝ見捨てゝは置けない事件ですから、三藏も一肌脱がずには居られません。

「宜しう御座います。一緒に参つた弟子に悟空と申すのが居りますが、なか／＼心利いた者で御座いますから、彼と相談致しまして、屹度黑白を見分けることに致しませう。では今晚はこれで失禮致します。」

自分たちの部屋に歸つて、悟空と明日の手筈を協議した上、寢に就きました。

◇ *Haltpunkt!*

翌朝三藏等は早起きをして寺を出立し、一旦城内の旅館に落着きましたが、町の往還は非常な賑はひで何か事ありげな様子です。

「御亭主、大變町が賑はつてゐますが、お祭りでもあるのですか。」

「イ、エ。あれは今日城内の大通りで、國王のお姫様が天婚の法により、お婿様を定められるといふので、それを見物に行くための人出ですよ。」

「ホ、ウ、一體その天婚の法とやらは、どんなことをするのですか？」

「天婚ですか、それはからなんです。お姫様といふのは、國王の一粒種で、今年二十歳になられますが、なか／＼いゝお婿様が見付からないんです。で、今日町の大通りの櫓の上から、お姫様自身が直々手毬を投げて、それに當つた人を婿になさうといふ譯なんです。あの見物に行く若い男たちは、みんな毬をぶつけられて、一足飛びにお世嗣にならうといふ野心があつて出かけるのです。あなた方もお暇なら行つて御覽なさいませ。萬一その毬にあたりでもしたら、それこそ三千圓の勸業債券に當るどころの果報ぢやありませんぜ。」

全くその通り。若し銀座の四辻で、チョツとした物持の娘ぐらゐるでも、天婚をやるといふんなら、ラッパ・ズボンで人死にが出来るほど押返すことでせう。

問題になつてゐる王女が見られる譯ですから、三藏は勧めに従つて見物に行くことにしました。野心満々たる八戒は、頻りに同行を乞ひましたが、叱り付けて悟浄と二人旅館に残し置き、悟空を伴れて大通りへ行つて見ますと、果して櫓の周圍に數萬の人が群がり、中にも面砲連が、ウヨ／＼首

を長くして毬を投げるのを待受けてゐます。

## (二) 天授の花婿様

もと／＼この王女は、この附近の山中に住む妖怪の精で、前年眞の王女を攫つて布金寺の祇園に捨て、自分が王女に成りすまして居たのですが、豫て三藏がこの國を通るのを知り、その童貞を奪つて長壽を得ようとしてゐたのですから、紛々たるモボには眼もくれません。多数の官女を従へ、殊勝らしく香など焚いて待つてゐましたが、やがて三藏が通りかゝつたのを見付けるや、立上つて毬を投げ付けると、コントロル過たず、發止とばかり三藏の帽子に命中した。

俺が俺がと、玉の輿を目當てに集まつた連中は、選りも選つて旅の和尚にお姫様を占められることになつたので、アツと一時に發した失望の歎息は町家の戸障子を揺がすばかり。櫓の上からは、官女がバラ／＼と降りて来て、

「三國一の花婿様、さあ／＼お姫様のお側へいらつしやいませ。」

と、袖を引張ります。三藏如何に王女の眞偽鑑定に來たのだとはいへ、添臥しまでせねばならぬとあつては、賜らざるを得ません。

「悟空、困つたことになつた。どうしたものだらう。」

「大丈夫ですから、王女と御一緒に宮中へいらつしやいませ。後で宿へお使を下されば、我々が参内してきつと何とか致します。」

三藏は仕方なく悟空と別れ、櫓の下に参りますと、待兼ねて居た王女はニコ／＼して三藏の手をとり、御車に合乗りして宮中に歸られる。當てが外れたモ・ボ連は、指を銜へて羨ましうに眺めてゐるばかりです。

王女はイソ／＼として國王の許へ参り、三藏を紹介しました。

「父さま、こちらが私のハズになつて下さる方ですのよ。どうぞ一日も早く結婚式を挙げさせて下さいました。」

「ウーン左様か。坊さんとはお前も物好きだな、本當に一生添ひ遂げる氣かい？」

「父さまは何を仰有るの。私が天から授かつた愛する／＼良人では御座いませんか。一生どころか、二世も三世も夫婦ですわ——ねえあなたや……」

人前も憚らず三藏にキッスでもしさうな勢ひ。國王の方では王女と年が二十も違ふ上に、旅塵に塗れた薄汚い坊主を世嗣にしたくはないが、可愛い一人娘が、非常な執心振ですから仕方がありません。

「お前さへその氣なら、わしは何も彼是言ひはせんよ。ぢや明後日は日もい／＼から、式を挙げることに

にしよう——これ和尚殿、縁あつて親子となる譯ぢや。わしもその中隠居して國を讓るによつて、隨分娘を可愛がりながら、政治をみておくれ。」

「陛下、どうかそれは赦して下さいませ。私はたゞあそこを通りかゝつて、偶然毬にあたつたゞけなのです。それに私は出家の身分で、これから經文を求めに行かねばなりませんから、どうしても妻帯は出来ません。何としても結婚は厭で御座います、厭で御座います。」

「なに？ 娘をやり、國をくれてやるといふのに、何が不足で厭だと申すのぢや、この没分曉漢奴が……強つて厭だと申すなら、この場で斬殺してしまふぞ！」

喜んで承知するものとはかり思つてゐたのを、頭から斷られたので、大變な怒りやうだ。三藏はここで殺されては、實も葉もないから、せつば詰つての一時免れ。

「ぢやあ貰ひます、戴きます。私の代りに三人の門弟を雷音寺へ遣はしますから、旅館に使をやつて、こゝへ呼び寄せて下さいませ。」

國王もこれを聞いて機嫌が直り、すぐ迎への使をやりました。



一方悟空は一人で宿屋へ歸つて來ると、八戒は不審顔。

「兄貴、お前一人で、お師匠様を何處に置いて來たんだい？」

「八戒、驚くなよ。お師匠様はな、お姫様の毬にあつて、お婿様になることにきまり、一緒に車に乗つて宮中においでになつたよ。どうだ羨ましいだらう。」

「さうかい、それは惜いことをした！ さうと知つたら俺が行つて毬にあたるんだつて。似合ひの夫婦が出来て、兄貴や悟浄もおれが引立てゝやるから、仕合せになるのだつたのになア。」

「ハ、ハ、ハ、お前のその面を見たら、お姫様は吃驚して氣絶なさるよ。」

「さう安く見てもらふめいぜ。顔こそ綺麗な方ぢやアないが、これでも味のいゝところがあるんだからね。」

「馬鹿も休み／＼言へよ。それよりか、今にお師匠様のお迎ひが來るに違ひがないから、荷物の支度でもして置け。」

「もうお師匠様は荷物なんぞの用があるもんか。一度夫婦の樂しみをお知りになれば、何も難澁して旅になどおいでになりはしないよ。」

三人で下らぬ話をしてゐるところへ、國王からお召しの使が來たので、打連れ立つて宮中に參向しました。

三人を引見した國王は、揃ひも揃つて奇怪な容貌なのに心中驚いたが、さりげない様子で話しかけ

られる。

「もう聞いたであらうが、今度お身たちの師匠が娘の婿にきまり、明後日婚禮を致す筈ぢや。就てはお身たちが代りになつて、その經文とやらを取りに行つて貰ひたいのだが、どうぢやの？」

「承知致しました。お師匠様さへそれで宜しければ、きつと私もだけで行つて参ります。」

「早速の承諾忝けない、あれも左様申して居るのぢや。では二三日こゝで休養して、それから出立してくりやれ。」

三人を奥の間に案内して、さまざまにもてなします。

その夜人が寢静まつた頃を見計らひ、三藏はオド／＼した顔で悟空の許へやつて来た。

「悟空、實に困つてしまつた。國王はどうしても婿になれ、ならなけや殺すといふのぢや。どうかして逃れる方法はないだらうか。」

「さうで御座いますな。私の考へでは、どうもこゝに居る方の王女が怪しいと思ひますから、明後日の御婚禮に参列して、眞偽を見きはめることに致しませう。しかし萬一こつちの方が眞物だつたらどう遊ばす？ このまゝこゝに居居つて、面白可笑しく一生をお過しになるのも、洒落てるでは御座いませんかね。」

「馬鹿なことを申すな。お前はわしを嘲弄しようといふのか。そんな失禮を申すなら、緊箍咒を唱へて苦しめてやるぞッ。」

「お師匠様、冗談ですよ、冗談ですよ。あの咒文だけは、どうぞ勘辨して下さい。——明後日は何でもして、きつとお救ひ致しますから……」

三藏もやつと安心して寢に就きましたが、翌日もまた前の日に優るやうな御馳走なので、八戒などは非常な喜びやう、溜飲が起るのも構はず、盛んにパクついてゐます。

### (三) 女王實は兎の怪

かくていよいよ婚禮の當日となれば、王女は朝から風呂に入つてテカ／＼に磨き立て、腰元ども三十人の手傳ひで、第一公式の衣裳を着けましたから、全く見る人を惱殺するやうな美しさ。殊に親の國王などは、眼を細くして大恐れです。

「おゝおゝ、立派にお化粧が出来たね。いよいよこれから式を擧げるばかりだが、何でもお前が、かうして欲しいと思ふことがあつたら、遠慮なく言つておくれ。どんなことでも叶へてやるよ。」

「お父さま、私はまだ見ないんですけども、腰元たちの噂を聞くと、ハズに蹠いて来た三人の男は、とても恐ろしい顔だといふでは御座いませんか。そんな男は見るのも厭で御座いますから、早くどこ

かへ追ッ拂つて下さいました。」

「いゝともく。實はわしも彼奴等が嫌ひなのぢや。では早速雷音寺へ出立させて、その後で式を擧げることに致さう。」

國王はすぐその足で接見所に至り、三藏及び三人の従者を召し出された。

「三人はこれからすぐに立出して、經文を求めに行つて參れ。婚殿はこゝに残つて、近いうちに國王の位に登るであらうから、お前たちは決して心配致すことはないぞ。」

「ハイ、では仰せに従ひ、早速立出することに致しませう——お師匠様、左様なら……」

アツサリ立上つて宮中を辭し去らうとする様子に、三藏驚いて窃かに三人の袖を捉へましたが、悟空は眼ばたきで、大丈夫ですといふやうな暗號をしたので、やむなくそのまゝ居残つてゐます。

悟空は一旦旅館に歸つて、例の分身法を行ひ、一本の毛を自分そつくりの姿に變じさせ、本人は小さな蜜蜂に變りました。

「俺はちよつとお師匠様を見てくるから、お前たちはこゝに待つてゐてくれ。若し亭主が來ても、い加減にあしらつて、決してこの俺には話しかけさせてくれんなよ。」

ブーンと宮中に飛んで行つて見ると、大廣間には婚禮の準備全く整ひ、大官重臣綺羅星の如くに居列んだ中を、王女は大勢の腰元にかしづかれて、さも嬉しうに入つてくる。續いて三藏が群臣に押

しやられるやうにして入場し、扉を並べて正面の座に着きました。これはまた戦々競々として、生きた色もありません。

悟空は師匠が富貴色慾を嫌ふのを見て、心中大に感じ入りながら、瞳を定めて仔細に王女の面態を覗ふと、果して妖氣紛々たるものがあります。偕はと心に打ち領き、三藏の耳の側に飛んで行つて、

「お師匠様、あの王女は確に妖怪に違ひありません。私が今やつ付けますから、驚きなさいませぬ。」と囁くや否や、矢庭に本相に返つて王女の袂をつかまへた。

「この化物め！ 貴様は榮華を盡しながら、何が不足で、和尚様の童貞を汚さうとするのだ。早く正體を現はしあがれッ。」

忽然と出現した毛むくぢやらの男が、破鐘のやうな聲で怒鳴つたから、満堂大混亂。腰元どもは悲鳴を揚げて逃げようとしたが、皆腰が抜けてその場にへたばつてしまひ、フー／＼吐息をついてゐるばかりです。

見現はされた賈王女は、バツと悟空の手を振り拂ひ、窓から逃げ出して、空中に飛び上つたのを、悟空も同じく雲を呼んで、逃さじものと追ひかける。王女は懷劍を抜き放つて、暫く戦つてゐたが、やかつて身を翻へして一團の金光と變り、悟空が眩しがつて、眼をパチ／＼してゐる暇に、逸早く南方に逃げ、とある山中へ姿を隠してしまつた。

悟空は餘り長追ひもせず、一旦宮中に歸つて見ると、呆氣にとられてゐた國王は、眞つ先きに訊ねました。

「悟空殿、あれは全くの妖怪でありましたか。」

「さうです、金箔付の妖怪で御座います。山蔭に隠れて姿を見失ひましたが、若し窺に宮中に戻つて来て、皆様に仇をしましまいかと思ひ、一先づ歸つて参りました。」

「それは千萬忝けない——しかしあれが妖怪とすれば、本當の王女は何處に居りませうか。」

「それは、あの妖怪を捉まへてしまへば、自然と判明致しませう。私はこれから退治に行つて参りますから、宿に居る八戒と悟浄をお召出しになつて、宮中の守護をお吩咐なされませ。」

再び先刻の山に行つて彼方此方と探し廻るうち、頂上の岩穴に髪振亂したまゝの姿で、隠れてゐるのを見付けた。

「コラ妖怪、この如意棒を喰はぬうち、早く正體を現はしてしまへ。」

「ほざくな山猿、よくも貴様は俺の邪魔をして、唐の和尚をものにしそこねさせたな。その恨み思ひ知れッ。」

棍棒をとつて鋭く打つてかゝれば、悟空は如意棒で渡り合ひ、兩々秘術を盡して戦ふこと數十分。妖怪もなか〜手繰の曲者で、勝負いづれとも見えわかぬうち、たちまち、空中から朗かな聲が聞えましました。

「悟空大聖、しばらくその戦ひを止めてはくれまいか——」



悟空はその聲のした方角を仰ぎ見ると、月の神様太陰皇君が、嫦娥姫御同道で雲の中に立つてゐられます。

「おゝ、お月様で御座いましたか。どうして私をお止めになるのです？」

「外でもないが、その妖怪はわしの廣寒宮で餅搗役をしてゐた兎、持つてゐる棍棒は杵なのぢや。いつぞや銷を抜けて下界へ逃げて來たのだが、今日大難に遇ふことが判り、命を助けてやらうと思つて参つたのだから、わしの顔に免じてどうぞ勘辨してたもれ。」

「さうで御座いましたか。外ならぬあなた様の仰せですから、勘辨してもやりませうが、彼奴は天竺國王のお姫様の風をして、私のお師匠様を誑かさうとした不良少女で御座いますよ。」

「それにも實は譯があるのだ。あの天竺の王女は、以前わしの召使だつたが、二十年前にあることの間違ひから餅搗の兎を打殺したため、その罪によつて下界に追ひやられ、天竺國皇后の腹を借りて、その娘に生れ代つたのぢや。一方ではその兎の忘れ形見が親の讐を討たうとして、前申したやうに

下界に降り、王女を苦しめたのだが、圖に乗り過ぎて三藏法師を良人にしようなどとしたのは、甚だ以て宜しくない。しかしまだ、三藏をどうしたといふ譯でもなく、いはゞ未遂罪だから、今度のころは大目に見てはくれまいかの。」

「さういふ因縁がありますのなら、私には別に異議は御座いません。どうぞ御自由にお連れ歸り下さいませ。」

「早速の承諾忝けない——これ兎公や、早く本相に還つて、わしの前に參らぬか。」

妖怪は先刻大陰皇君が見えた時から、地べたに顔を付けて這ひつくばつてゐましたが、かう聲をか

けられると同時に、眞白な兎に變り、ピョン／＼皇君の前へ跳んで行きます。嫦娥姫はこれを金の

餅搗き兎が戻つたので、後世のお伽噺にも、依然この兎が現はれて來る譯なのです。

悟空は急いで皇居に歸り、ことの仔細と、布金寺に本物の王女が居る話を告げましたので、國王は

早速家來を遣はして王女を呼び迎ひ、親子一年振りの對面に、一時打ち濕つた宮中は一陽來復、さん

ざめく喜びです。國王は悔悟と感謝のしるしに、畫工に命じて三藏等四人の像を描かせ、これを神殿

に掲げて、救國の主とあがめ祭り、連日宴を張つて下にも置かぬ歡待ぶり。四五日の後、出發の際に

は、國王の御車に三藏を乗せ、群臣と／＼もに十數里先きまで見送つた上、名残を惜んで別れました。

## 寇長者の家

### (一) 萬僧歡迎の高札

それから半月餘りの後、銅臺府の都にはひりますと、日本なら三井とか岩崎とかいふやうな、大富豪と覺しき邸宅の前に、「萬僧不阻」即ち和尚さん大歡迎の立札があるのを認めて、一夜の宿を求めました。主人の老翁は自分で出て來て、何くれとなく一行をもてなし、殊に遙々と唐の國から經文を授かりに來た由を聞いて、非常な喜びです。

「よく立寄つて下さいました。私は寇大寬と申す者ですが、土地の人達は寇長者などと呼んでくれます。四十の時から一萬人の御出家に供養を志さしまして、今日まで二十四年の間九千九百九十六人に齋を差上げ、もう四人で満願といふところへ、あなた方のやうな有徳の高僧が見えたことは、何といふ仕合せで御座いませう。こゝから大雷音寺までは僅か八百里足らずですから、どうぞ御寛り滞在なすつて下さいませ——コレ／＼お前たちもこつちへ來て、唐の和尚様にお目にかゝるがよい。」  
老夫人や寇梁寇棟といふ二人の息子と呼んで、一行を禮拜させる。若い息子たちは遠い唐國からの客と聞いて、好奇の眼を見張らずにはあません。



「私たちが地理書で讀んだところによれば、この西牛賀州から、唐國のある南瞻部州まで十萬七八千里とありましたが、一體こゝまでいらつしやるのに、何年おかゝりになりました？」

「我々は途中數へ切れぬほどの難儀に遇つて、いろ／＼と手間取りましたので、指折り數へて見ますと、最早出立してから十四年目になるので御座います。」

「それは大變で御座いましたなあ——今日はお疲れで御座いませうから、ゆつくりお休みになつて、明日でもまた途中のお話を聞かせて下さいませ。」

「宜しう御座いますとも——ぢや御主人、今日はこれで失禮させていただきます。」



翌日もその翌日も家を擧げて至らざるなき歡待。一行は禮心から、この家の佛事に關はつたり、旅行談をして聞かせたりしますから、長者親子も何よりの客とあがめて、容易に放してくれませぬ。遂ウカ／＼と四五日を過ぎましたが、心せく三藏は七日目の朝、寇長者に向つて暇を乞ひました。

「御好意に甘えて、便々と滞留致しましたが、今日は是非お暇しようと思ひます。長々の御厄介、本當に有難う御座いました。」

「それはいけません。和尚様はどうしてそんなにお急ぎになるのです。何かお氣に障つたことでも御座いましたか。」

「どう致しまして、私たちは何とお禮申してよいか、その言葉に苦しんでゐるくらゐです。たゞ唐國を出立の砌三年で歸ると國王に申して參りましたのに、もう十四年もかゝりましたから、一日も早く行つて来ようと思ふので御座います。どうぞ今日は出立させて下さいませ。」

三藏が強ひて辭退するのを、傍で聞いて居た八戒は、堪り兼ねてシヤリ／＼出た。

「あのやうに仰有つて下さるものを、お師匠様も頑固過ぎるぢや御座んせんか。こちらはこの通りの大家ですもの、半年や一年居つたつてちつとも困りやしませんよ。何も無理矢理辭退して、また冷飯を貰つて歩くには當らないと思ひますがね……」

「黙れ阿呆、何といふたわけたことを申すのぢや。お前は食ふことばかり考へて、經文を求めに行くことを忘れたのか。それならわし一人で行くから、お前たちはこゝに残つてゐるがい。」

從者一同コミにして叱り付けられたから、悟空までコワイ顔をして八戒を睨み付ける。八戒は不平満々、ブツ／＼言ひながら引き下つたところへ、今度は老夫人と二人の息子が出て来て三藏を引き留めませぬ。

「この子たちも、もつとお話を承りたいと申して下さし、私も未來のためにもつと功德を積ませたいとゞきたう御座いますから、どうぞもう五六日御逗留なすつて下さい。私の隣縁はみなお布施に

差上げますから。」

しかし三藏は飽まで辭退するので、氣短な婆さんたうとう怒り出してしまつた。

「人の好意を無にするのにも、程といふものがありますよ。もう何も申しませんから勝手になさい。」  
プイと横を向いたつきり口も利きません。長者は押宥めて、

「婆さん、和尚様も御用があるんだから、さう怒りなさんなよ——ではかう致しませう。せめて今日一日だけ延ばして下さつて、御出立は明朝になさい。さうすれば親類縁者を狩り集めて、盛大なお見送りを致しませう。」

三藏もこれまでは斷り切れない。是非なく一晩泊つて翌朝いよく別れる段になりますと、長者は果して親戚や近所の人を集めて、送別の大宴會を催し、樂隊を先頭に「送唐僧之西遊」だの「三藏大和尚萬歳」などといふ旗を立て、賑々しく見送りに押し出します。まるで田舎の金持の息子が入營でもする時見たい。町には見物が大勢出て、寇長者の豪勢ぶりに、驚かないものはありません。

## (二) 強盜團を膺懲

十里ばかり行つてから、三藏は一同と別れを告げて、只管道を急ぐうちに、晝過ぎから曇り出した

空は、たうとう大雨になつたので、一行は路傍に荒れ果てた祠堂を見付け、一夜をこゝに過すことゝなりました。八戒は寝るところもないやうな、堂内を見廻して不平タラ〜です。

「寇長者があんなに引止めるのを、無理矢理に立つていらしたから、こんなヒドい目に遇ふんぢやありませんか。言ふことを聞いて、あの家に居さへすれば、今頃はおいしいお茶で、ホカ〜した飯を食つてゐられるものを、こゝでは飯をもらふところもないし、寝ようたつて寒くて寝られあしませんぞ。」

「八戒、お前はまだわしを怨んでゐるのか、たわけた奴ぢや。諺にも、長安好しと雖も久しく戀ふるの家にあらずと言ふことがある。經文を授かつて唐へ歸つたならば、皇帝に申上げて、大膳職にある御馳走を、お前の腹の皮が裂けるまで食はせてやるから、もう愚圖々々申すな。」

八戒も仕方がないから、膝小僧を抱いて黙然と坐つてゐるうち、ダラシのない顔をして、そのまゝ寝入つてしまひました。



却説、この銅臺府に三十人ばかりで組んで居る不良青年團がありました。この日、寇長者が三藏を送る際の豪奢ぶりを見て、急に悪心を起し、その夜風雨に乗じて寇家へ強盜に押入つた。家人一同

驚いて八方に逃げ隠れたが、年はとつても氣丈な長者、獨り居残つて彼等の顔を見極めようとした、  
め却つて賊に蹴殺されたのは飛んだ災難で、不良團はありとあらゆる金銀財寶を奪ひ取り、風の如く  
に逃げ去つてしまひました。

やがてそれ／＼隠れたところから出て来た家の人たちは、この有様を見てたゞ泣くばかり。中に老  
夫人は豪奢を盡して三藏等を送つたために、泥坊に見込まれてこんな大難に遇つたのだと、たゞ一心  
に三藏を怨み、いゝ加減な作り事をして子供等に告げます。

「泥坊は今朝立つた和尚たちぢや。早く警察に訴へて、彼奴等を捕まへておくれ。」

「え、泥坊はあの和尚ですと？ 母上はどうしてそれを御存じですか。」

「わしは椽の下に隠れて覗いてゐたから、何も彼も知つてゐる。炬火を持つたのは三藏、槍を下げた  
のは八戒、金銀を取つのは悟浄で、お父さんを蹴殺したのはあの悟空奴ぢや。」

「さうで御座いましたか、あのやうな高恩を受けたのにも拘らず、金銀を奪ひ取るのみか、父上まで  
殺害するとは返す／＼も憎い奴。遠くは行きますまい、これから直ぐに訴へ出て、きつと讐を討  
つて貰ひます。」

早速その筋に出頭し、その趣を訴へたので、警視廳は近來の大事件として非番巡查までも總動  
員。約二百名の警官が、足拵らへも稟々しく、犯人の追跡に向ひました。

斯ることがあつたとは夢知らぬ一行、祠堂に一夜を明して翌朝出發しましたが、一里ばかり行つた  
ところで、路傍の藪蔭から、突然大勢の強盜が躍り出した。

「やい、貴様等は寇長者の家に泊つてゐた坊主だらう。貰つて来た路用を残らすこゝへ置いて行けば  
よし、四の五のぬかすとぶつた斬つてしまふぞッ。」

えらさうに脅かしたまではよかつたが、悟空は斯と見るよりむにや／＼定身の呪文を唱へたので、  
一同刀を振上げたまま、硬くなつた様は宛ら下手な活人畫のやう。悟空にやり笑つて一掴みの毛を抜  
き悠々これを繩に變へ、八戒悟浄の三人で、一人残らず縛り上げたうへ、呪文を元に返したから、  
強盜連は呆れ返つて、眼をばちくりするばかりです。

「さまあ見ろ。貴様だけはこれまでうんと悪事を働いたであらう。眞直に白状せぬと、この棒で臈  
にしてやるぞ！」

「ど、どうぞ御勘辨下さいませ——私たちは皆あの町の者で御座いますが、道樂の擧句金に困つて、  
不圖悪心を起し、昨晩寇長者の屋敷へ押入り、初めて強盜を開業したばかりです。今あなた方の路用  
まで奪ひ取らうと欲張りしましたゝめ、罰が當つてこんな目に遇つちまつたので、これからきつと改心  
致しますから、どうぞ命だけはお助け下さいませ。」

側らでこれを聞いてゐた三藏は、驚いて悟空に注意しました。

「悟空、それは恩人の家で大變なことだ。その盗んだ品を取り上げて、お返しするやうに取り圖らつてくれ。」

「御尤もです——これ貴様たちが盗んで来たものを、皆こゝへ出せ。さうしたら贈にするのは赧してやらう。」

「はい、命さへお助け下されば。盗んだ物は愚か、私どもの着物から禪でも何でも、洗ひ浚ひ差上げますので御座います。」

「誰が貴様たちの下帯など要るもんか。さあその品物は何處にあるのだ？」

泥坊の指示により、藪蔭に隠して置いた夥しい金銀財寶を運び出して、白馬に荷付けした上、絞束通り繩を解いてやると、泥坊どもは蜘蛛の子を散らすやうに、八方に逃げ去つてしまつた。

### (三) 一行に殺人の嫌疑

三藏等は圖らずも恩返しの出來たことを喜び、馬を曳いて銅臺府へ引返さうとしてゐるところへ、追跡の警官隊が駆付けて來て一行の姿を認めるや、それつと言ひさま押取り圍んで、有無を言はず四人を搦め上げた。三藏はおろ／＼聲——

「悟空よ、わしたちは、なんにも悪いことをせぬのに、どうして縛られるのだ？ 早くなんとかしてくれ。」

「御心配なさることはありません。このお巡りたちは、きつと私等を泥坊と間違へて縛つたんです。抵抗してぶち破るのは何でもありませんが、それも殺生ですから、溫和しく警察へ引つ張られて行つて、その上で充分申開きを致しませう。」

一行は彼等のなすがまゝに任せ、銅臺府の警視廳へ引つ立てられる。兇賊逮捕の報に喜んだ警視總監は、威猛高になつて自ら三藏達を取調べます。

「こら、その方どもは和尚の風を装つてゐるが、實は夜移ぎの強盗だらう。昨晚、寇長者の家に押し込み金銀を奪つた上、長者を慘殺したのは、その方たちに違ひはあるまい。さあ、包まずに白狀しろッ。」

「いや、私どもは何も存じません。昨日まで數日の間、寇長者の家で厄介にはなりましたが、賊に入つたの人を殺したのなどは、微塵覺えのないことで御座います。」

「偽りを申すな。賊にはひつたことのない者が、何で寇家の財寶を持つてゐたのだ。あのやうに物的證據がある上、長者の奥さんは確かに賊はその方どもだと申してゐるぞ。」

「滅相もないこと。私どもは圖らずも寇家にはひつた賊に出會ひましたから、せめてもの御恩報じ

と、彼等を追散らし、贓品を取上げて返しに参らうとするところを、間違はれて警官方に捕まつたのです。私どもが唐國の和尙に相違ないといふ證據は、この旅券を御覽になれば判ることですから、どうぞ仔細に御檢分下さい。」

「ふむ、如何にもこれは通過諸國の査照を受けた旅券に相違はない。が然し、何故その方たちは、大勢の賊を追放す程の力がありながら、一人なりとも捕まへて置いて、證據にはしなかつたのだ？ それも致さず財寶ばかり持つて居たとあつては、賊でないといふ反證にならないか。兎に角、拘留して置いて、ゆつくり取調べにやならん——これく係りの巡查、この四人を留置所にぶち込んで置け！」

罪なくして緹繼の辱しめを受け、異郷の獄窓に繋かれる身となつた三藏は、悲しさ口惜しさに、たゞ咽び泣くばかりです。しかし悟空に入戒は至つて平氣なもの。

「御師匠様、明日はきつと嫌疑が晴れるでせうから、さうお歎きなさいますな。それにこゝは案外靜かですから、まあ安心して御寛りおやすみなさいませ。」

「さうだ、兄貴の言ふ通りだ。昨夜のあばら屋よりは、ずつと上等ですし、これにこゝなら、あまり美味しくないにしても、辨當にや有り付けますよ。」

三藏もこれに力を付けられて、漸く涙をとめ、やがて夜も更けたのでうとく眠りに就かれた様子。悟空はこれを見るや、きつと胸中に思案を定め、一疋の羽蟻に變じて、長者の家の方へ飛んで行きました。

こゝに寇家の門前に、一軒の豆腐屋がありました。朝の早いのは天竺も日本も同じと見えて、この家の老夫婦は暗いうちから起き出で、婆さんは釜の下を焚き、爺さんは豆を挽きながら、いろく世間話をしてゐます。

「寇長者も、金もあれば子供もある何不足ない身分だつたのに、全く氣の毒な目に遇はれたのう。確か俺より五つばかり年下で、昔は同様貧乏だつたが、あの奥様と一緒になつてから、運がよくなられたんだ。あの奥様の若い頃のことを、おぬしは知つてゐるか。」

「それはお爺さん、知つてゐるところかいな。あの奥様は子供の時分穿針さんといふ名で、わし等の遊び仲間だつたわいの。お父さんの張旺といふ人が、この界限一番の金持だつたが、死んで世嗣がなかつたために、その財産がみんな長者殿の物になつたのだよ。」

「さうした譯だつたのかい。それにしても一萬人もの御出家に供養をして、えかい善根を積まれたのに、あんな非業な死に方をなされるとは、前世に大きな罪でもあつてぢやらうかのう。」

「本當にお氣の毒な御最後をなされたものぢや。南無阿彌陀佛、々々々々々々。」

羽蟻の悟空は、逐一老夫婦の噂話を聞いてから、長者の家に行つて見ますと、老母の二人と息子が棺の前に額づいて、駭り泣きながら通夜をしてゐます。悟空これを見済まして、こつそり棺の上にとまり、いきなりエヘン！と大きな咳拂ひをしたから、三人は吃驚した。兄弟はその場に打伏し、ぶる／＼慄へてゐるばかりだつたが、老母はやつと氣を取り直して、

「旦那様、あなたは生き返つていらつしたのですか……」

「いや／＼さうではない。わしは閻魔王の吩咐で、お前たちを責めに參つたのぢや。これ穿針、お前はどうして偽りを言ひ立て、人を罪に陥したのだ？」

「私の幼な名をお呼びになるからは、正しく旦那様ぢや——もし旦那様、私はそんなことを致した覺えは御座いませんが。」

「嘘を申すなツ！あの唐から來た和尚たちは、わしを殺した強盜を捕まへ、盜まれた財寶を取り返して下さつた恩人なのに、お前はいゝ加減は訴へを致して、罪もない和尚たちを苦しめてゐるではないか。閻魔王はこれを知られて、ひどくお怒りになり、お前たちを冥土に連れて來いと、きついお達しなのだ——」

長者そつくりの聲色を使つて、嚴しく誣告を責め立てるので、胸に覺えのある老母は、心から恐れ入つてしまひ、青くなつてぶる／＼慄へてゐるばかりです。悟空はこゝで語勢一轉——

「しかし、わしもお前を冥土へ連れて行くのは可哀さうぢやによつて、早くその筋に出頭して告訴の取下げを致せ。さうしたなら、わしが閻魔王にお願ひして、お前等の命乞ひを致してやらうと思ふがどうかぢや。」

「はい／＼、屹度さう致します。唐の和尚たちを泥坊と思違へて訴へましたのは、みんな私の過ちで御座います。夜が明けましたら早速警視廳へ願ひ出ますから、どうぞ命を助けるやうにして下さいませ。」

「左様か。ではわしは再び冥土へ歸るによつて、一刻も早く左様取圖らうがよいぞ——ゆめ／＼違ふること勿れ。」

かう氣取つた聲がした後、最早間として何の音も致しません。

#### (四) 閻魔王に頼む

時は早や東雲の曉の頃、そつと寇家を飛出した悟空は、方向を變へて警視廳に行つて見ると、重大

事件勃發に緊張してゐる總監は、早くも登廳して、部下とともに何やら評議してゐます。悟空心に思ふやう、かう大勢居るところへ羽蟻の姿で現はれたのでは面白くない、一つ魂のでんぐり返る程脅かしてやれ、といふ譯で、忽ち空中に飛上るや、まるで奈良の大佛を立上らせたやうな大男に代り、お午のサイレン見たいな太い聲で、吼えるが如くに怒鳴りました。

「やい、ポリスどもよつく聞け！ 我こそは天上玉帝の御使浪々遊神なり。汝等眼あれども視る明なく、唐僧に無實の罪を着せて留置するとは奇怪至極、速かに釋放致さばよし、愚圖々々致さば、この家諸共、汝等を踏み潰してしまふぞッ。」

總監等一同はその聲に驚いて窓から空中を見上げると、五つ抱へもあらうと思はれる太い毛脛で警視廳の屋根を踏んまへて居ますから大狼狽。平素の威嚴も何も打忘れ、悲鳴を揚げて歎願します。「あやまります〜。あの生き佛様を捕まへたのは、全く我々の過りでした。唯今直ぐ放免致しますから、どうぞそのお御足を動かさないでゐて下さい。」

「その言葉に相違はないな。若し少しでも遅れると、またやつて来て踏み殺すぞ。」充分脅した上で毛脛を引込め、羽蟻になつて監房に飛歸り、何食はぬ顔をして濟し込んでゐる。青くなつた總監は、直ぐ釋放させようとしてゐるところへ、寇長者の息子たちが息せき切つて駆け付け、前夜の次第を語つて告訴取下を願ひ出ました。これを聞いた廳員一同益々靈異に驚き、急いで

三藏等を引出して總監室に招き入れ、御機嫌をとるために、親子井だの餅菓子だのといろ〜御馳走して、平謝りにあやまります。

前々から中つ腹でたまらなかつた八戒は、これぐらゐでは堪能致しません。「なーんだ、こんなケチな井ぐらゐで、自分たちの大縮尻を許して貰はうといふのか。苟くも我我家が、窃盜殺人の悪名を着せられては、こゝまで、は歸られねえ。さあ何とこれを補償してくれるんだ〜ねい、お師匠様だつて御同感で御座いませう。」

「まあさう荒立てるな。もとい〜寇家の訴へから、警察が我々を捕まへたんだから、これから長者の家に行つて見て、一つには恩人の靈を弔らひ、二つには何故我々を盜賊と訴へたかを問訊さうではな

いか。あの通り總監も陳謝してゐられるから、もう勘辨してお上げ。」  
八戒も長者の家に行けば、もつと〜美味い物が食べられると思ふもんだから、納得して怒りを納め、廳員の最敬禮裡に、四人は辭して寇家を訪問しました。



梁、棟兄弟は、三藏達が門前に見えたのを認めて慇懃に出で迎ひ、奥座敷に招き入れた上、頻りに詫入りしましたが、最初から一行に好意を持たなかつた老母は、佛頂面をして縁にも言ひません。

これを見て怒つたのは悟空です。

「この糞婆奴！ 嘘を言つて我々を罪に陥さうとしながら、知らん顔をしてけつかる。さういふことなら、長者の魂に本當の下手人を聞いて来て、うーんと取つちめてやるから、その時吠え面かき腐るなよ。」

言ふが早いか、いづこへか飛び去つたから、さすがの老母もどうなることかと驚き恐れて、ぶるぶる慄へてゐます。

悟空は十萬億土もたゞ一飛び。冥土總督府に閻魔王を訪問して、今度の不法拘留事件を詳細に物語り、長者の壽命を延ばして貰ふやう懇ろに頼み込む。閻魔王も外ならぬ舊友の懇望ですから、即座に快諾を與へ、事務員に命じて靈魂陳列室から長者の魂が入つた壙を取出させ、悟空に返してくれました。これで見ると靈魂不滅説なんか閻魔の廳に行きさへすれや、譯なく證明が出来ます。

何しろ魂が手に入つたんだから、もう占めたもの。悟空大喜びで閻ちゃんに禮を述べ、急いで寇家に立歸り、棺の蓋をあけて長者の口へ件の壙を當てがひますと、その効驗は酸素吸入どころの騒ぎでなく、今まで死んでゐた長者はむく／＼起き上りました。

「これは／＼和尚様もいらしてゐて下さいましたか。私は強盜に蹴殺されて、お別れした晩から冥土に行つてゐましたが、先刻、悟空殿が見えて私の魂を御無心になつてゐたと思ふうち、この通り生き返ることが出来たのです。命の親と申していゝか、再生の恩人と言つていゝか、全くお禮の申上げやうも御座いません。」

四人の足下にひれ伏して、心から感謝の言葉を述べる。

悟空はこゝで、老母の悪計から一行が囚はれの身になつたことを逐一言ひ聞かせたので、長者は猛烈な憤慨。婆さんの首を斬つて詫び、印にしようとまで敦囑しましたが、三藏の執りなしで漸く納まり、そこへ警視廳の手を経て、盜難の金品全部が戻つて來ましたから、重ね／＼の喜びです。

長者は先日中にも優る饗宴を張つて、一行をもてなし、警視總監その他政府の大官も宴に參列して、謝恩、慰安、歡送迎及び再生祝賀等の意味まで加はり、銅臺府あつて以來の大盛會。翌日出立の際に例の如く樂隊、旗幟を先頭に官民數千人で二十里餘りを見送り、行を壯んにしました。

### 大雷音寺到着

#### (一) 凌雲渡の危難

一行が日一日と靈山に近づくにつれて、樹木花草の類まで何となく清々しく、通りかゝる家々では喜んで齋を供養し、方々から看經の聲が洩れ聞えるのも、さすがに佛地とらなづかれます。やがて五



六日の後には靈山の裾野に著きましたので、三藏は溪流に沐浴して五體を淨め、足どりも軽く進んで行きますと、忽ち洋々たる大河の前に立ちました。見ればその邊には渡船の影も見えず、「凌雲橋」と標柱のある唯一本の獨木橋がかゝつてゐるばかり。名は同じでも上野公園のとは違ひ、二三里もあるかと思ふやうな細くて長い橋です。

悟空は、體操の教官が梁木でも渡るやうに、平氣で向う側へ越えましたが、三藏は勿論、八戒、悟淨まで意氣地なくも尻込みして、渡らうとしません。

「おーい八戒、何をまご／＼してゐるのだ？ お師匠様のお手を引いて、早く此方へ渡つて来いよ。」  
「だつて兄貴。俺はとて恐くて渡れはしない。仕方がないから雲に乗つて飛んで行くよ。」

「雲に乗つて来ちや佛には成れないんだ。是非橋を渡つて来い。」  
「そんなことなら、俺は佛に成らずに歸つちまふからいゝや。」

「はゝゝゝ、困つた奴だな。ぢや仕方がないから俺が引返すとしよう。」  
いくら言つても駄目なので、悟空は再び東岸に引返し、三藏を間に、皆で手を引き合つてそろりそろりと渡り始めました。

何しろ三里もあらうといふ長い橋を、こは／＼蟲の這ふやうに渡つて行くんだから、その間だるつこいことつたらない。悟空は胸中いら／＼してゐるところへ、恰度一艘の舟が橋の下を通りかゝつた

ので、三藏喜んで飛び乗らうとしたはずみに、足を滑らして川の中にどぶん。泳ぎの心得がないから、ぶ／＼と沈んで行く。

三人驚いて船の中に飛び込み、船頭も一緒になつて漸く三藏を引き上げると、不思議やそつくりな土左衛門が、川下へ流れて行くから三藏はびつくりした。

「おや／＼、あれはわしの死骸だ！ 一體これはどうしたことだ。」  
「はゝゝゝ、あれはお師匠様の肉身で、凡俗に離脱し佛になられた證據で御座いますよ。」

「左様か、それは有難いことぢや。南無阿彌陀佛、々々々々々々。」  
自分で自分の土左衛門に回向してゐるんだから世話はない。八戒と悟淨は手を拍つて可笑しがつて

あるうち、舟は無事向う岸に著き、船頭は棹を執つて再び中流に漕出したと見えたが、忽ち佛體に變じ彩雲に乗じて山上に飛んで行かれた。これなん靈山の式部官を勤むる接引佛祖でしたから、三藏はその有難さに頓首九拜するのみです。

一同は身も心も浮々と、勇み勇んで山を登り行く程に、間もなく大雷音寺の眞下に着きました。見上ぐれば巖々たる峻峯、その光景を原文を辿つて叙して見ると――

「頂は霄漢の中を摩し、根は須彌の脈に接す。巧峯排列、怪石參差し、懸崖の下に瑤草琪花匂ひ、

曲徑の傍に紫芝香薰ず。仙猿桃林に入つて果を摘み、白鶴松に棲んで枝頭に立つ。彩鳳日に向つて天下の瑞を鳴き、青鸞風を迎へて世間の稀を舞ふ——」

(あゝ、草渡れた。ところ／＼中略にして先きを急ぎます)

「また見る黄森々たる金瓦は鴛鴦を疊むに似、明幌々たる花磚は瑪瑙を鋪けるが如し。東に一行西に一行、盡く蕊宮珠闕、南に一帶地に一帶、都て寶閣珍樓なり。天王殿上霞光を放ち、護法堂前紫燄を噴く。正にこれ地天の別を知らず、雲閑にして晝長きを覺ゆ。紅塵到らず諸縁絶し、萬劫虧くる無き大法堂」

——といふ次第、まるでパッキンガム宮殿、ヴェルサイユ宮殿や日光の東照宮などを一緒に集めて、グラント・キャニオン公園にでも持つて行つたやうな風だから、宏大なもんです。



三藏は、いよ／＼目的のゴールにはひつた嬉しさ喜ばしさに、我を忘れて眺め入つてゐるところへ

大勢の和尚や尼さんが迎へに來ました。

「さあ／＼、早くおいでになつて、お釋迦様にお目にかゝりなさいませ。」

皆で手を引いて一の門に來ると、出迎へた二大金剛が四人を迎引して二の門の四大金剛に引継ぎ、更に二の門から三の門と順々に唐僧の着到を報じ、大雄殿へと招き入れる。釋迦如來も大變な御機嫌で、八菩薩、四金剛、五百阿羅漢、三千揭諦、十一大曜、十八伽藍の諸佛を従ひさせられ、唐僧一行を御引見になります。三藏、恭しく旅券を捧げて、

「私は東土大唐國の佛弟子玄奘三藏と申します者。皇帝の命により衆生濟度の眞經を授かりに參つたもので御座います。願はくば御惠みを持ちまして、經文をお授け下さいませ。」

と申し上げれば、如來は御聲朗らかに、  
「善哉々々。汝等の本國は土地が廣く人こそ大勢だが、心邪まなる者多く、永世阿鼻地獄に墮ちて、哀れにも苦艱を嘗めるものが少なくない。偶ま孔氏が現はれて仁義禮智の道を説き、歴代の帝王が徒流絞斬等の刑罰を定めて人民に望んだけれども、愚昧無智の輩には殆ど効果がなかつたのぢや。これも偏へに正しい教へを示す書籍がなかつたためだから、今汝の功勞を嘉して、余が藏する法藏論藏經藏の經文計三十五部一萬五千一百四十四卷を、悉く汝にとらせ遣はす。持歸つてその教へを唐國にひろめ、癡愚の凡夫を徳化するやうに致せよ——これ阿難に迦葉、お前たちは唐僧に齋を與へ

てから、あの寶藏へ案内致せ。」

「はは——」

一行を食堂に案内していろ／＼と馳走致します。この料理類も俗世界の物とは違つて、單に美味なばかりでなく、一箸毎に精神が爽かになるやうな珍品揃ひ。食事が終ると、二尊者が先きに立つていよく、目的の經文庫へ導き入れました。

宝藏

(二) 庫番が賄賂強要

目録

庫の中には五彩の霞が漲り、その間に金銀珠玉を鏤めた經櫃が、一々經卷の名を記した紙を貼付けてあつて、整然と列べられてある。三藏は嬉しさに暫くは茫然として見入つてゐる時、二尊者はにや／＼しながら手を差し延べました。

「へ／＼／＼、あんたは唐の國から來たんだから、何か我々にお土産を持つて來たらうね。」

「え、お土産ですつて？ それはどうも、誠に申譯がありませんが、餘り遠いところから參りましたので、何も持つて來ませんでした。」

「さうかい——手ぶらで來た人へ、たゞで大事な經文をやつちや、後で我々は餓死しなくちやならんがね。」

土産のあてが外れたので、二人は甚だ不機嫌なやうです。短氣な悟空はカツとなつて、

「何だと、この瀆職野郎奴！ ぢやお釋迦様にお話して、直接に經文を授けていたゞくわい。」

「は／＼／＼、何もさう眞赤になつて騒ぐなよ。誰もやらないといふんぢやないから、さつさと持つて行くがい／＼や。」

「ふ／＼ん、黙つてゐたつて持つて行くわい。」

ふん／＼しながら、八戒悟淨とともに經文を引出して白馬に負はせ、再び釋迦如來の前に出て厚く御禮を述べた上、佛達にも別れを告げていそ／＼歸國の途に就きました。



一行は十四年間の艱難辛苦の末、遂に最後の目的を達したので、勇みに勇んで道を急ぎましたが、實は阿難迦葉に渡されたのは、無字の經と言つて見たところは全くの白紙。上位の佛たちでなければ讀み得ない經文で、兩尊者が悟空に罵られた腹癒せに、こんな惡戯をしたのです。

經藏の監督役である燃燈老佛といふお爺さんは、先刻ちやんとこれを見てみましたから、氣の毒でなりません。

「可哀さうに、無字の經とは知らずに持つて行つたが、あのまゝ唐へ歸つてそれと判つたら、さぞ力を落すだらう。何とか知らせてやりたいものだ。」

と下役の白雄尊者に、旨を含めて一行を追ひかけさせました。

白雄は委細領承。秒速七十メートルばかりの烈風を起して、これに打ち乗り、瞬く間に追付いて天上から眺めると、三藏はじめ四人とも欣々然として歩いてゐる。先頭で足の早い悟空が、やゝ後の三人と離れた頃を見ました白雄、いきなり空中から手を伸して、馬の背から經の包を取上げるや、ばらばらに振解いて地上に投げ捨て、素早く逃去つてしまつたから、後で氣付いた悟空もどうすることも出来ません。

三藏は突然の椿事に、驚き且つ悲しんで涕淚滂沱。

「この極樂にも、こんな悪いことをする者が居つたのか。」

と皆で落ち散つた經文を拾ひ集めてゐるうち、不圖見れば一字半點の跡もない白紙と判つたから、二度吃驚です。

「や、や、これは何も書いてない白紙ぢや、こんなものを、はるく唐へ持つて歸つたとて、たゞ笑はれるばかりぢや——悟空、これは何としたことであらうのう。」

「お師匠様、これはかうで御座いませう。あの阿難と迦葉の慾張奴、土産を貰はぬ腹癒せに、わざと

こんな白紙をくれたのに違ひありません。どの途引返して行つて、お釋迦様へ賄賂強要を訴へ出ようぢや御座いませんか。」

八戒も側から賛成して、

「全く兄貴の言ふ通りだ。アンナ、カヨフな奴はないよ。」

この急場に際して、下らん駄洒落を飛ばしてゐる。

悟空が眞先に立つて再び大雷音寺に引返し、ぶり／＼しながら釋迦如來の前に伺候した。

「お釋迦様、私どもは十四年間千辛萬苦を重ねて、お經をいたゞきに参りましたのに、あの阿難と迦葉が、土産がないのを怒つて、こんな字の無い經文をくれたのです。あんな者がこゝに居るといふのは、極樂淨土の恥辱ぢや御座いませんか。抑も公務員としてコミッションを要求する瀆職罪は、刑法第九十七條の明文によつて三年以下の懲役或は……」

「これ／＼悟空、さう騒ぎ立てることはない。あの二人が土産を要求したことも何も、わしはよく知つて居るのぢや。が、あの經文はさう輕々しくは渡せぬので、お前たちの熱心さを試して見るため故意と手敷をかけたのであらう。あの白本は實は無字の眞經で、却つて尊いのぢやが、お前たちにはまだ／＼讀めまいから、改めて字のある方を遣はすと致さう。」

再び二尊者に命じて、お經庫に案内させましたが、矢張り前と同じく土産物を請求します。しかし

三藏は今度は要領を心得てゐますから、先年出立の際、皇帝から賜はつて来た紫金の鉢を取り出しました。

「先刻も申し上げた通り別にお土産としては用意して来ませんでした。これは唐の國王から下された鉢で、途中齋を求める折に用ひた品で御座います。どうぞお土産のしるしまでに、これをお納めなすつて下さいませ。」

二人は心中、三藏の熱意に感じ入り、字の有る經文を出してくれましたので、馬の背に餘つた分は八戒が背負ひ、一同晴々した顔で釋迦如來の前に伺候する。如來は降龍伏虎の兩羅漢に磬を打たせて、再び天上の佛達を召集になり、正式の授受を遊ばされます。何しろ三千諸佛、三千揭諦、八金剛四菩薩、八百比丘僧、大衆優婆塞、比丘尼、優婆夷等靈山中のあらゆる佛陀聖僧が一堂に集まつたのだから、瑞光彩霞は四邊に搖曳き、樂の音は嘽嘽と響いて、何とも言へぬ有難い光景。命によつて二尊者が讀上げた經文の目録は、

- 涅槃經、菩薩經、虛空藏經、首楞嚴經、恩意經大集、決定經、寶藏經、華嚴經、禮眞如經、大般若經、大光明經、未曾有經、維摩經、三論別經、金剛經、正法論經、佛本行經、五龍經、菩薩戒經、大集經、摩竭經、法華經、瑜伽經、寶常經、西天論經、僧祇經、佛國雜經、

- 起信論經、大智度經、寶威經、本闍經、正律文經、大孔雀經、維識論經、俱舍論經、

合計三十五部五千四十八卷といふ莫大なものです。如來は嚴かなお聲で、

「この經文の功德は眞に廣大無邊ぢや。天下四大部州の天文、地理、人物、鳥獸、花木のことより、禮儀、道德等何一つとして載せてないものはない。お前が南瞻部州に歸つたならば、齋戒沐浴してこれを開き、一切衆生に示してその徳に與からせるがい。」

と仰せられたので、三藏は有難涙に搔暮れながら、幾度も佛恩を謝して歸國の途に就きました。今度こそ字の有る經を授かつたのですから、間違はありますまい。

### (三) 受難八十一度目

一行が山門を出ると間もなく、觀音菩薩は何が思ひ出した様子で、釋迦如來に話しかけられた。

「私が先年仰せによりまして、唐國に赴き、經文を受ける僧を選んだので御座いますが、今日その目的が終りましたので、心から本懐に存じます。たゞ年數を數へて見ますのに、今日まで十四年、即ち五千四十日、八日少ないために經文の卷數とは合ひませんので御座います。如何で御座いませ

うか、あと八日の間に四人をこゝまで歸つて來させ、卷數と日數とを合せるように致しましては？」  
日歩の金を借りてるんぢやないから、日數なんかどうでもよささうなもんだが、佛様方はこんなこと  
とが大切と見えて、如來もすぐ贊成なさつた。

「如何にもそれは宜しからう——では金剛が參つて東土へ見送つた上、八日のうちにこゝへ連れて戻  
つて來い。」

片道に十四年かゝつたところを、往復八日で連れて來るようとのことですから、愚圖々々しては居  
れません。金剛は直ぐ跡追ひかけて行つて、一行にこの趣を告げ、雲に飛び乗つて道案内に立ちま  
す。悟空等三人はもとより、白馬も龍の化身ですから雲は自由。三藏だけでもちゝしてゐるのを、  
悟空が手を取つてひよいと雲の上に引き上げると、既に佛果を得て居ますから、以前とは違ひ輕々と  
飛び乗りが出来る。そこで遠見の利く悟空が、方位係を承はり、フルスピードをかけて東の方へ  
と眞つしぐら——

一方、觀音菩薩は、自分が推薦した三藏が經文受取に成功したので、我がことのやうな喜びやう。  
御殿に歸つてからも、三藏の道中を守護した神々を召されて内祝ひをなされながら、三藏の遭難の話  
などを聞いてゐられました。その數を集めて見ると恰度八十遍になります。

「ふうむ、八十度とは随分苦勞をしたものぢや。しかし佛の教へに九九眞に歸すといふ語があるが、

八十一にはまだ一難だけ足りない。その數に合はせるやう、お前たちが追ひかけて行つて、最後の  
修業を積ませて來ておくれ。」

觀音様は餘程勘定を合はせるのがお好きと見えて、またこんなことを言ひ出された。

神々は命に従ひ、雲に馬力をかけて追跡したが、向うも急いでゐるからなかく追付かない。一晝  
夜飛行の後漸くに誘導の金剛を見付け、こつそり菩薩の仰せを傳へますと、金剛は點頭いていきなり  
三藏達が乗つてゐる雲の端を引張りましたから、中心を失つた四人は、白馬諸共スンテンコロリと地  
の上に落こつた。

しかし體が出来てゐるので、幸ひ誰にも怪我こそなかつたが、この突然の墜落には吃驚せざるを得  
ません。

「これはどうしたといふんだらう。餘り我々の雲が早いから、金剛君が休憩しようとして、我々を落  
こしたのかしらん？」

「うん、さうかも知れないぞ。したが一體こゝは何處だらうな。」

「おやく、大きな川がある。何だか見たことのあるやうな川だな。」

見たことがある筈、先年靈感大王に謀られて氷の中に落された通天河です。三藏は眞先に當時の  
ことを思ひ出して、

「いつぞや向う河岸の陳澄兄弟の家に泊つて、二人の子供を救つてやつたことがあつたではないか。その時は白い龜が現はれ我々を渡してくれたが、この西河岸には船もないし、どうして渡つたらいいだらうの。」

「さうで御座いますなあ……」

相談をかけられて三人は、安全な渡河方法につき首を捻つてゐるところへ、川の中から大聲で呼びかけるものがある。

「皆さん、こつちへいらつしやいませ。」

四人が驚いて振返ると、水がもくもく盛り上つて、浮び出て來たのは先年の大きな白龜です。

「お久しう御座います。私はあの後今日まで、和尚様のお歸りになるのをお待ちして居りました。さあさあ私の背中に乗つかつて川をお渡りなさいませ。」

「左様であつたか。先年も世話になつて、また御苦勞様をかけるのは氣の毒ぢやな。」

「何のわけのないことで御座います、御遠慮なさいませ。」



四人は喜んで馬と一緒に大龜の背中に乗れば、龜は足を開いて威勢よく泳ぎ出し、僅かの間に對岸

近くに來た時、振向いて三藏に聞きました。

「和尚様、貴方が如來様にお遇ひになつたら、私が何時畜生界を脱けて人間になれるかを、伺つていたゞくやうお願いしましたつが、如來様の御返事はどうで御座いましたらう？」

三藏はかう問はれてハタと答へに詰つた。實は天竺で釋迦如來にお目にかゝつた時、經文を貰ふこ

とにのみ氣が取られて、白龜との約束を忘れて來たのだから、何と返す言葉もなく、顔を赧くして、下俯向いてゐられるばかりです。

龜の方では、偕は忘れて聞いて來なかつたのだなと氣付き、かつと怒つてそのまま水底に沈んでしまつたから、三藏は忽ちあつぷく。しかし以前とは違ひ、凡體ではなくなつて居られるから、直ぐに溺れるやうなことがなかつたので、三人がよりで抱き上げ、漸く東岸に泳ぎ付きました。

何分三藏の方に違約の落度があるのだから、誰も怨みやうもありません。水びたしになつた經包みを解きひろげて日に干し、一同は日向ぼつこをしながら、着物の乾くのを待つてゐましたが、忽ち一陣の旋風が起つて、經文を捲き上げようとしてしまつた。四人はそれを吹き飛ばされまいとして、彼方此方と抑へ廻り、大變な騒動です。

やがて風もやゝ熄んだ頃、通りかゝつた漁師が、一行の顔を見知つてゐて、このことを陳家に告げましたので、兄弟は取るものも取敢ず、大勢の召使ひをつれて迎へに參りました。

「和尚様何をなすつていらつしやるのです。どうして私の家へお寄り下さらないのですか、さあ早くおいでになつてお休み下さいませ。」

頻りに勧めますので、三藏も好意もだし難く、經卷を取纏めて立上つたが、今のどさくさで佛本行經の二三巻が、どこかへ吹き飛ばされ、どうしても見付かりません。

「悟空よ、とんだ粗相をしてしまった。それもこれも皆わしの不徳からで、下さつた釋迦如來に對しても、御申譯のないことだ。」

「お師匠様、何もさうくよくなさることはありませんよ。物事は總て充分なのがよくないんです。少しばかり足りないところに、却つて妙味があるぢや御座いませんか。」

「うん——それもさうだな。」

悟空の哲學に慰められて、氣を取り直し、陳家に迎へられてその邸に行きますと、先年命を救つてやつた子供の一種金と陳關係は、立派に成長して十五六の少年少女になつて居り、その他の家人も總出で、珍珠佳肴を取揃へ心からの歡待を致します。しかし一行は天竺の御馳走を食つてから、餘り下界の物を欲しなくなり、八戒君すら僅か一杯半で箸を置いて「どうしたんだらう、俺の胃が弱くなつたのか知ら……」と不思議がつてゐるのは滑稽至極。

村人は活佛様の御來臨だと、代るく禮拜に來り、引留められてその夜はたうとう泊ることにな

つたが、考へて見るとさう便々としてゐる譯には行かない。

「悟空、どう致したものでやらう。こんなところに長く留められては、間違ひが起きないとも限らぬと思ふが……」

「御尤もで御座います。ぢやいつか慈雲寺でやつたやうに、夜逃げと出かけませう。」

「ではさう致すとしよう。」  
寢てゐる八戒、悟淨を呼び起して、その支度を吩咐ける。八戒も以前とは違つて直ぐ起き上り、いそぐ準備を整ひ、一同でこつそり家を脱け出した時、空中から案内役の金剛が、

「晝間はひどい目に遇つてお氣の毒でしたね。さあ、早く私に蹤いておいでなさい。」  
と聲をかけます。自分で雲から落つこととして置きながら、知らん顔して體裁のいゝことを言つてゐる。三藏はこれで觀音様の御註文通り九々の難を濟したわけで、一同再び雲に飛び乗り、フールスピードで東に向ひました。

#### (四) 十四年目に歸國

かくて飛行一晝夜半ばかりの後、早大唐の首都長安城の近くに來ました。十四年ぶりに見る懐しい



郷土、三藏の眼に涙が宿るのも決して無理ぢやありません。金剛は後振向いて、

「いよいよ長安に着きました。しかし我々が姿を見せるのは宜しくないから、法師一人で經文を献上しておいでなさい。我々はこゝで待つてゐて、御用の濟み次第御一緒に天竺に歸ることに致しませう。ねえ悟空君、さうしてくれ給へな。」

「だつてお師匠様一人でお經を背負つたり、馬を挽いたりは出来ませんよ。私達も蹠いて行きますから、どうか暫く待つてゐて下さいな。」

「しかし、觀音様から八目のうちに歸つて來いと、言ひ渡されて來たのに、もう五日も經つてゐるからなあ。それに八戒君が行つちやア、御馳走に未練を残したりして、早切り上げは危ないもんだからね。」

「じよ、冗談言つちやいけませんよ。私だつて成佛したいんですもの、誰が食ひ物なんか心を取られるもんですか、大丈夫ですから暫くの間待つてゐて下さいな。」

靈山を拜して以來、八戒の面目全く一新した感があります。金剛も安心して承諾しましたので、一行は雲を下りて王城に向ひました。

顧れば貞觀十三年九月十二日、太宗皇帝三藏を天竺に遣はされてから、その後同十六年に土木局に命じて城内に壯大な經樓を建立させ、年々こゝに行幸あり。この日も恰度龍駕を拵けて、樓上

に居られました。西の方から薰風が吹いて來たと思ふ間もなく、三藏一行が雲に乗つてやつて來るのが見えました。太宗は驚き且つ喜び、群臣を兩側に列べて待つてゐられるところへ、一行は靜々と雲を下り、地上に跪いて最敬禮を致します。

太宗はそれから一同を從へて、宮城に還御になり、早速正殿に於いて經文捧呈の式が行はれることになる。三藏は三人の弟子に命じて經卷を御前に運び出させ、西遊の途中通過各國で査照を受けた旅券とともに、恭しく太宗に献上致しました。

「十四年前勅命を奉じて、天竺に向ひ、唯今恙なく歸朝致しまして御座います。持ち歸つた經文三十五部五千四十八卷は即ちこれで御座います。」

「それはくゝえらい御苦勞であつたぞ。わしが大乘の眞經を得ようと思ひ立つたことから、飛んだ骨折をかけたのう。」

御機嫌いとも麗はしく、近侍に命じて經卷を經樓に收めさせた上、旅券を披いて御覽になると、最初の寶象國から金平府に至る各國元首の御印が盡く押捺してあります。

「ホウ、これだけ多くの國々を通過したのか。して靈山まではどれくらゐの道程であつたか？」

「全部で十萬八千里と承はつて居ります。」

「道中定めていろゝな難に遇つたであらう。話して聞かせよ。」

三藏は途中の幾百の遭難から、天竺大雷音寺に於ける仔細を物語り、尙三人の門弟及び白馬の來歴や功勞などを残る限なく奏上しましたので、太宗は勿論列びある文武百官、皆感嘆せぬ者がありません。

「その三人の門弟達にも會ひたいものぢや。こゝへ呼べ。」

「イヤ、彼等は野育ちのもので、御前に出まして失禮があつては恐れ入ります。どうぞお赦し下さいませ。」

「イヤ、決して苦しうない。誰ある、こゝへ三人を案内して參れ。」

侍従の誘導で、三人は帝に謁を賜はり、なほ盛宴を張つて一行に天盃を賜ひ、親しくその勞を慰められます。一同は無上の光榮に浴し、やがて御前を辭して、三藏が住持であつた洪福寺に引取りました。

洪福寺には以前から一本の大きな松の木がありました。先年三藏が天竺へ赴く際、この松の枝が東に向つたならば、わしが歸つて來るのだと思へと言つて出立したのでした。それから十四年、寺の僧侶たちは毎日のやうに、木を見上げて今日か明日かと待侘てゐましたが、この朝松の枝が悉く東を指し、間もなく歸着の知らせがありましたので、皆々非常な喜びです。

一同拾り鉢巻で寺内を拭き淨めるやら、庭を掃除するやらしてから、上等の法衣に着替へて門前に

待つてゐるところへ、大勢の役人に送られて四人がやつて來た。

「お目出たう御座います。」

「お歸りなさいませ。」

「御機嫌宜しう御座います。」

「お住持さま萬歲ッ。」

「なんまいだぶ、〜。」

いろいろのことを言ひながら、擔ぎ上げるやうにして、奥殿に招じ入れる。三藏も、久方振りに舊門下に遇つて、さすがに嬉しくてなりません。互ひに旅中のこと、留守中のことを語り合ひ、深更に及んで三人とともに寢に就きました。八戒等も、すでに佛果を得てゐる身とて、齋を負つたり、下らぬ騒ぎをするやうなことなく、顔のマツいのは仕方がないが、その座作進退は、實に堂々たるものです。

(五) 皆佛菩薩に化す

翌朝三藏等は再び參内致しますと、眞經を得た喜びに溢れてゐる太宗は、今日御菩提寺の雁塔寺で

是非講義をしてくれるやうにとの御誼です。歸りを急ぐ三藏も否む譯には行きません。

「では、仰せに従ひ、ホンの少しだけ説教致しませう——しかし、陛下が今後、眞經の教義を流布遊ばす折には、寫本でおひろめ下さいまして、持ち歸りました原本は、大切におしまひ置き下さいませよ。」

「如何にもお身の申す通りに致すであらう。」

四人は太宗の御車に従つて、鴈塔寺に至れば、この高僧の説教を聴聞しようとして、集つた僧侶大衆實に數千人、まるで西瓜の出盛りに、神田の青果市場にでも行つたやうな光景です。

三藏眞經を手にしてやをら講壇に登り、朗々と讀誦を始めた時、空中から大音で、金剛の呼ぶ聲がした。

「三藏殿、もう日限がない。講義はやめにして、早く天竺へ行きませう。」

これを聞いた三藏は、經文を差置いて、太宗に向ひ、

「お聞きの通り、靈山に歸る日限が、もう切迫して居ります。お名残惜しうは御座いますが、どうぞお赦し下さつて、お暇を賜はりますやうに……」

と言ふが否や、ヒラリと中空に舞ひ上れば、壇下に待つてゐた三人も、白馬諸共一齊に雲に乗り、金剛に従つて西方に飛去りました。

太宗はじめ列座の大衆は、みんな呆氣に取られたが、追ひすがる術もないから、何とも致し方がない。目を改めて別の高僧により、眞經讀誦の大會を開き、また、右筆に命じて、數千部の寫本を書かせ、これを國內に頒ちましたから、俄然として人情に醇化の風が見えます。後世日本に傳はつて來た經文も、みんなこれが元なのですから、日蓮でも親鸞でも納所でも小僧でも、總て三藏に感謝せねばなりません。

三藏等は道を急いで八日の期限内に雷音寺に着きましたので、釋迦如來は四人を召出し、諸佛諸菩薩侍立の上、官職親授の式が行はれます。

「三藏、汝の前世は我が門弟の金蟬子だつたが、法を輕んずる罪により、魂を奪つて東土に生れ變らせたのぢや。今幸ひに我が教義に従ひ、經文を東土に傳へた功勞は廣大である。依つて汝を高職に昇せ、旃檀功德佛と致すによつて左様心得よ。」

三藏は身に餘る面目に感泣して、頓首九拜佛恩を拜謝し、御前を引下る。次に呼び出されたのは、隨行者中第一の功勞者たるわが悟空君。

「悟空、汝は五百年前天上を騒がせたので、我が法力により五行山に封じて置いたが、その後天災を終つて佛門に歸依し、三藏を護衛して、妖魔を退治しながら、無事に目的を遂げさせた。その大功に酬ゆるため、汝に鬪戰勝佛の職を與へるぞよ。」

三藏と同じ佛の位を授けられたから、華果山の石猿としてはエライ出世だ。次は八戒、モジ〜し  
ながら如来の前にかしこまつた。

「猪悟能、汝は蟠桃會の折、酒に酔うて女官に戯れ、その罪によつて畜類の腹に宿り、福陵山で妖  
怪となつたものぢや。また色慾の氣と懶惰の風が脱け切らないやうだが、途中三藏の荷物を擔ひ、魔  
物と戦つた功が少くないによつて、淨壇使者菩薩を命ずる。」

これを聞いた八戒は、頗る不平さうな顔です。

「兄貴が佛になつたのに、私は淨壇使者とか言ふ役にしかならないのは、ちと不公平ぢや御座いま  
せんか。御ジヨウダンでせう。」

「は〜ム〜ムそれは違ふ。汝は胃袋が大きくて、非常な大食と聞いたから、恰度恰好な職を與へるの  
ぢや。今滿天下にわしの教を奉ずる者多く、その諸々の佛事の際に、汝が壇を淨める役となつて居  
れば、供へてある品々を自由に食ふことが出來て、こんな結構なことはないではないか。」

かう教はつて八戒は満足したと見え、ぺこ〜お辭儀をして引下り、お次は沙悟淨です。

「悟淨、汝も蟠桃會で亂暴したため、流沙河に墮され、人を喰つては生きてゐたが、改心して三藏  
を助け、經文を求めしめた功により、金身羅漢菩薩と致し遣はす。」

更に如来は白馬まで呼出して仰せられます。

「汝は廣晉龍王の子で、父の命に背き不孝の罪はあつたが、佛教に歸依して、三藏を乗せ、經文を  
本土に持ち歸り、またこゝに參つた勞苦は大抵ぢやなかつたと思ふ。よつて汝を天龍廣力菩薩に任  
ずる。」

これで四人と白馬は、みんな佛菩薩に昇らせられたので、いづれも大満足です。如来は掲諦に命じ  
て、白馬を靈山の後ろにある化龍池に浴させると、忽ち、立派な金龍と變じ、威風凜々四邊を拂つ  
てゐます。

悟空は金龍を見て、三藏に申しました。

「白馬さへ菩薩の位を授けられて、あんな立派な本體に變つたではありませんか。私も今はお師匠様  
と同じやうに佛になつたんですから、もう緊箍咒で私をたしなめられることも御座いませんでせう。  
どうぞあのいやな金の箍を外して下さいませ。」

「あなたの仰せられる通りぢや。まあ、頭に手をやつて御覽なさい、もう何にも簪つては居りま  
せん。」

同格の佛となつたのですから、三藏の悟空に對する言葉も、自ら變つて來る。悟空は頭を撫ぜて  
見ますと、何時の間にか金の箍が無くなつてゐますから大喜びです。

斯て四人は金龍とともに一齊に佛果を授かり、他の五十八の諸佛諸菩薩と同席に居列べば、天上

から五彩の花片がひらく降りかゝり、四方に瀏唳たる音楽が鳴り響いて、その美その妙言語に絶するばかり、一同合掌して、

如是等一切世界諸佛、願以此功德、莊嚴佛淨土、上報四重恩、下濟三途苦、若有見聞者、悉發菩提心、同生極樂國、盡報此、十方三世一切佛、諸尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅密——

と讀誦齊唱し、世界人類のために祈禱致します。悟空等も新米ながら立派な佛ぶり、どこに出しても恥しくない姿となりました。

三藏君萬歲、悟空君萬歲、八戒クン萬歲、悟淨君萬歲、金龍君萬歲。も一つおまけに讀者諸君萬歲——。

西遊記 終

西遊記

昭和六年二月十日印刷  
昭和六年二月十三日發行

<p>世界大衆文學全集 第六十七卷 西遊記</p>		<p>譯者 弓館小鱈</p>
<p>發行者 山本美</p>	<p>印刷者 森江有三</p>	<p>東京市芝區愛宕下町四ノ四〇 東京市外北品川宿小勝五六四</p>
<p>發行所 東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地</p>	<p>改社 振替口座東京八四〇二番 電話芝(43)自一一二一 至一一二四番</p>	<p>版權所有</p>
<p>發兌</p>	<p>發行所</p>	<p>發行所</p>

(株式會社豐文社印刷)

# 世界大衆文學全集總內容

第一卷	鐵假面 (佛國大ヂユマ)	大佛次郎 (既刊)
第二卷	家なき兒 (佛國マロー)	菊池幽芳 (既刊)
第三卷	前線十萬 (米國ヤン・ヘー)	櫻井忠温 (既刊)
第四卷	アルセーヌ・ルパン (佛國ルブラン)	保篠龍緒 (既刊)
第五卷	樺ノン・レスコオ <small>（佛國小ヂユマ）</small> オ <small>（佛國プレボオ）</small>	久米正雄 (既刊)
第六卷	三銃士 (佛國大ヂユマ)	三上於菟吉 (既刊)
第七卷	放蕩息子子 (英國ケイン)	菊池寛 (既刊)
第八卷	ダイヤモ <small>（英國フレツチャイ）</small> ト <small>（英國ライト事件）</small>	森下雨村 (既刊)
第九卷	オリヴァー・ツイスト (英國デイッケンズ)	馬場孤蝶 (既刊)
第十卷	トウエーン名作集 (米國トウエーン)	佐々木邦 (既刊)

第十一卷	秘密第一號他一篇 (英國ホルラア)	木村毅 (既刊)
第十二卷	巴里の秘密 (佛國シユ)	武林無想庵 (既刊)
第十三卷	アングル・トムス・ケビン (米國スト)	和氣律次郎 (既刊)
第十四卷	英米新進作家集 (歐米諸家)	牧逸馬 (既刊)
第十五卷	メトロポリス他一篇 (獨逸ハルボウ)	秦豊吉 (既刊)
第十六卷	カチユウシヤ (露國トルストイ)	近松秋江 (既刊)
第十七卷	九三年 (佛國ユゴー)	早阪二郎 (既刊)
第十八卷	寶島他二篇 (英ステイヴンソン)	野尻清彦 (既刊)
第十九卷	スペードのキング 四枚のクラブ <small>（瑞西ヅーゼ）</small>	小酒井不木 (既刊)
第二十卷	ラス・ボラ <small>（米國ブローチー）</small> エ <small>（佛國ミユルゼ）</small>	森岩雄 (既刊)
第二十一卷	シャロック・ホームズ (英國ドイル)	延原謙 (既刊)

第二十二卷	ゼンダ城の虜	(英國ホープ)	寺田 鼎	(既刊)
第二十三卷	紅 藜 藁	(英國オルツイ)	松本 泰	(既刊)
第二十四卷	宇宙 底 旅 行	(英國ウエルズ) (佛國ヴェルヌ)	木村 信兒	(既刊)
第二十五卷	平 妖 傳	(支那羅貫中)	佐藤 春夫	(既刊)
第二十六卷	ルコツク探偵 河 畔 の 悲 劇	(佛國ガポリオー)	田中 早苗	(既刊)
第二十七卷	スカラムツシユ	(米國サバチニ)	小田 律	(既刊)
第二十八卷	洞窟の女王 ソロモン王の寶窟	(英國ハガード)	平林 初之輔	(既刊)
第二十九卷	海の義賊他一篇	(佛國ベルネエド)	高橋 邦太郎	(既刊)
第三十卷	ポオ。ホフマン集	(米國ポオ) (獨逸ホフマン)	江戸川 亂歩	(既刊)
第三十一卷	三等水兵マルチン	(英國タフレイル)	福永 恭助	(既刊)
第三十二卷	幻島ロマンス	(米國ゲール)	野口 米次郎	(既刊)

第三十三卷	ロモラ	(英國エリオット)	賀川 豊彦	(既刊)
第三十四卷	世界滑稽名作集	(歐米諸家)	東 健 而	(既刊)
第三十五卷	世界怪談名作集	(歐米諸家)	岡本 綺 堂	(既刊)
第三十六卷	世界怪奇探偵事實譚	(歐米諸家)	松本 泰	(既刊)
第三十七卷	グラランド・バビロン・ホテル	(英國ベネット)	平田 禿 木	(既刊)
第三十八卷	水 滸 傳	(支那施耐庵)	笹川 臨 風	(既刊)
第三十九卷	永 遠 の 都	(英國ケイン)	戸川 秋 骨	(既刊)
第四十卷	ロビンソン・クルイソン	(英國デフォー) (佛國ヴェルヌ)	白石 實 三	(既刊)
第四十一卷	テ ス	(英國ハーデイ)	廣津 和 郎	(既刊)
第四十二卷	二 都 物 語	(英國ドイツケンズ)	名原 廣 三 郎	(既刊)
第四十三卷	血 と 砂	(西班牙イバニェス)	鈴木 厚	(既刊)

第四十四卷	カルメン。コロンバ	(佛國メリメエ)	宇高伸一(既刊)
第四十五卷	ポムペイ最後の日	(英國リットン)	小池寛次(既刊)
第四十六卷	小公子。小公女	(英國バアネット)	佐佐木茂索(既刊)
第四十七卷	あゝの山越えて	(米國カートン)	尾崎士郎(既刊)
第四十八卷	赤機衣物の博士	(佛國ゴロオー) (英國キユウ)	大木篤夫(既刊)
第四十九卷	妖花アラウネ	(獨逸エーヴェルス)	淺野玄府(既刊)
第五十卷	ガリヴァーの旅	(英國スウィフト)	鈴木彦次郎(既刊)
第五十一卷	十字軍の騎士	(波蘭シエンキキツチ)	森田草平(既刊)
第五十二卷	シーホーク	(米國サバチニ)	小田律(既刊)
第五十三卷	黒星	(米國マツカレ)	和氣律次郎(既刊)
第五十四卷	ノートルダムの偏癡男	(英國ユーゴー)	松本泰(既刊)

第五十五卷	冬來なば	(英國ハッチンソン)	木村毅(既刊)
第五十六卷	クオ・ヴァチス	(波蘭センキウキツチ)	直木三十五(既刊)
第五十七卷	ラ・バタイユ	(佛國フアレエル) (佛國ルブラン)	高橋邦太郎(既刊)
第五十八卷	千一夜物語	(戀愛篇)(レオン原譯)	森田草平(既刊)
第五十九卷	モーブ	ラ(佛國サンド)	大村雄治(既刊)
第六十卷	ソーンダイク博士	(英國フリーマン)	水野泰舜(既刊)
第六十一卷	チエイン・エア	[上卷](英國ブロンテ)	遠藤壽子(既刊)
第六十二卷	チエイン・エア	[下卷](英國ブロンテ)	遠藤壽子(既刊)
第六十三卷	ウオタ・ベビ	(英國キングスレ)	阿部知二(既刊)
第六十四卷	ワグネル物語	(英國ラム) (英國マックスパデン)	菊池重三郎(既刊)
第六十五卷	ヴェンデッタ	(英國マリイ・コレリ)	千葉龜雄



583 754  
16 193

第六十六卷	聊齋志異 (支那蒲松齡)	田中貢太郎 (既刊)
第六十七卷	西遊記 (支那邱處機)	弓館小鰐 (既刊)
第六十八卷	八犬傳物語 (馬琴)	内田魯庵
第七十九卷	八犬傳物語 (馬鹿)	内田魚目庵
別卷	版部金太郎全集	
	自叙傳 A トリキン吉原ニ現ル	
	ハ神 B 癸祭事件	
	<del>...</del> C ニエテカメロン 助カラ	
	D コーモリ図書館事件	
七十一卷	フロナ立志傳 七十三卷	
七十二卷	オーゴンハツトリの旅記 七十四卷 糸川故庵ハ	

田中貢太郎  
弓館小鰐  
内田魯庵  
内田魚目庵

569  
61

